伝習館

東京同窓會会報

第11号 2011.1.1

機整形

伊藤 一宮崎(地名)

谷田高 隈

山梨学院

柔道、剣道場

剣一 弟子 一剣

平成22年度東京同窓会総会をふり返って

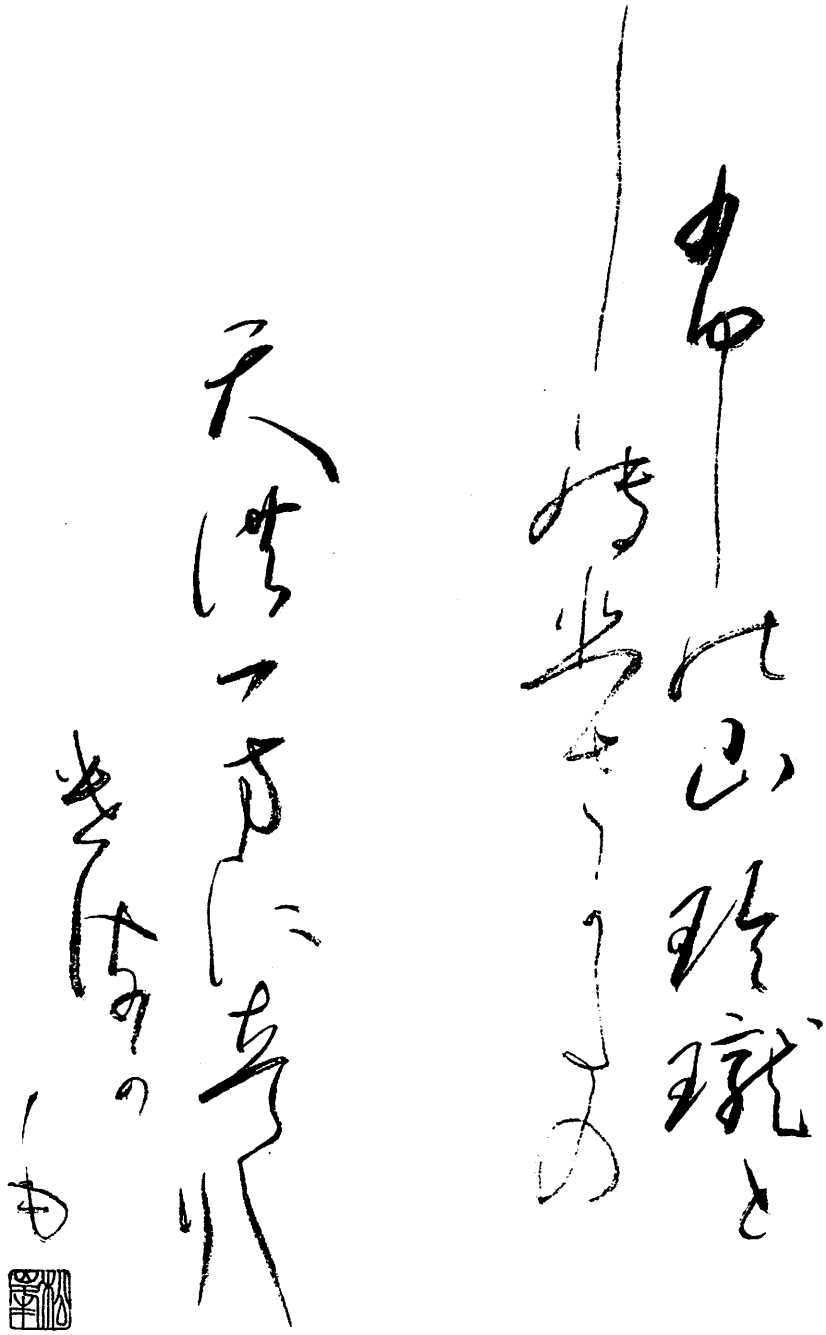
柳川と立花家　―第17代立花家当主・立花宗鑑

伝習館と立花家　―（安東省菴顕彰会）立花民雄

顕彰　廣松　渉

青春のパイプライン

ふるさと瓦版



—表紙写真の紹介—

撮影　高8　樋口誠佑 氏

——高8回学年幹事——

表紙裏の書　高6　木村松峯（峯子）氏

——略歴等第9号にて紹介ずみ。平成22年新にスペインAMSC（国際美術評論家選考委員会）より「永久無鑑査公式認定作家」に認定された——

ふじの山れいろうとして
ひさかたの天の一方に
立てりけるかも

北原白秋

第11号　2011.1.1

東京同窓会本部より

平成23年年頭の挨拶 …… 会長　江崎　正直 …… 2
修学旅行生との交流会 …… 副会長　松永　肅 …… 3
東京同窓会の歩み …… 副会長　松永　肅 …… 4
総会をふり返って …… 高21　白谷　政則 …… 5
平成22年度同窓会総会会計報告 …… 6
賛助金ご協力状況報告 …… 7
賛助金通信欄コメント …… 8
東京同窓会決算収支報告 …… 9
総会講演要旨／柳川と立花家 …… 立花家17代当主　立花宗鑑 …… 10
藩校伝習館 …… 高17　立花民雄（安東省菴顕彰会） …… 13
お知らせ―追悼・立花文子さま― …… 14

母校だより

新館長着任挨拶 …… 15
進路状況 …… 15

先輩・後輩より

顕彰　廣松　渉 …… 中56　成清　良孝 …… 16
よかやっかんも …… 高1　横山二三男 …… 20
遠き日のおもいで …… 高4　高士権兵衛 …… 21
柳川の絵　第5回 …… 高5　岸　洋子 …… 23
第60回伝習館同窓会総会に出席して …… 高8　樋口　誠佑 …… 23
柳川笑話② …… 高7　田中敬之助 …… 25
ガキの頃の思い出 …… 高11　龍　勝 …… 26
白秋自筆の絵はがき …… 高12　小野アケミ …… 26
青春のパイプライン（授業篇その2） …… 高18　福山　博彰 …… 27
柳川だより …… 高14　黒田　喬 …… 29

学年幹事より

第6回―昭和30年卒だより― …… 高6　石橋　修 …… 30
高14回同期会開催 …… 高14　石橋　俊一 …… 30
各卒年別同期会開催一覧 …… 編集局 …… 31

ふるさと瓦版

船頭体験は楽しかったばんも～ …… 32
柳川沖端に水族館 …… 32
白秋生家の銘酒復活 …… 32
権門に媚びず、時流に堕せず～曽我祐準～ …… 33
柳川にこの人あり …… 33

新刊紹介

オノ・ヨーコの華麗な一族 …… 34

伝習館

東京同窓会会報

東京同窓会本部より

平成二十三年　年頭挨拶

総会と交流会

会長　江崎正直

皆さん！　明けましておめでとうございます。

昨年は二つの大きな催しがありました。一つは隔年毎の同窓会総会、もう一つは修学旅行生との交流会です。

立花家あっての柳川、立花家あっての伝習館ですが、意外と立花家のことについて知らない人が多い。そこで今回は総会に先立つ講演会で「立花家と伝習館」と題して、立花家の宗鑑（むねあき）様（長男）と民雄様（三男）のお二方から、それぞれ貴重なお話しを頂戴しました。内容は本文に掲載された通りです。

大半の大名が東京へ去ってしまったのに、立花様は愛郷心が強く、柳川に踏み止まられて、地元の発展に貢献されました。柳川で開催される全学の同窓会総会の懇親会は、お花の広い庭があるからこそ、1,000 名近い同窓生が、一堂に会して親睦を深めることが出来ます。

残念なことに、立花家の大奥様、終戦後、お姫様から女将（おかみ）さんへ変身されて、お花を再興された文子（あやこ）様が、去る 10 月 14 日、100 歳で天寿を全うされました。直前に挙行した総会の席には、お元気に車椅子でご出席され、笑顔を振りまいておられました。亡くなられたとお聞きしてびっくりしました。暑さで体調を崩されたのでしょう。ご冥福をお祈りいたします。

総会の方は今年は若手の参加が多く、がんばってもらったおかげで、盛大に開催することが出来ました。お互いに同じ学び舎で十代の後半を過ごしたことは、貴重な経験でありご縁であります。同クラスはいうに及ばず、同窓として年齢を超越して語り合うことが出来ます。郷土柳川から取り寄せた物産展も好評で、全部売り尽くしてしまいました。総会を中心に会全般の運営について、学年幹事や実行委員の皆さん方には、ボランティアでご協力いただいていることに心より感謝します。

修学旅行生交流会の方は、昨年と同じパターンで、六組に分かれて行われました。生徒たちは男女とも服装もきちんとして、会えば挨拶をするという礼儀をわきまえ、好印象を与えます。交流会を通じて視野を広めることは、大変有意義なことです。毎年少しずつ改良して、よりよい交流会にして行こうと考えています。学区制がなくなったことで、大牟田からも多数の生徒が伝習館に来ていることは喜ばしいことです。先生、生徒の努力で、母校のレベルが少しでも高まるよう期待しています。

今年も正月明けにこの会報第 11 号が届きます。出版にかなりの費用がかかりますから、一人でも多くの方に賛助金のご協力をお願い致します。

今年もお互いに健康でよい年にしましょう。

平成22年度修学旅行生との交流会について

平成16年から始まった恒例の修学旅行生との交流会も今年で7回目を迎えました。

今回も、去る9月14日（火）宿泊先のリーガロイヤルホテル東京の宴会場「ロイヤルホール」で19時30分から21時まで、2時間30分にわたり開催されました。

生徒数は240名、東京の同窓生の現役大学生・現役の社会人・大先輩の皆さん方40名が一堂に会し、三宅清二館長・江崎正直東京同窓会会長の合同挨拶のあと6グループに分かれ夫々クラス別交流、ディスカッションに入りました。

以前にも増して現役大学生・若手の社会人が多数加わり、交流会の内容も生徒が興味を持つ話題が大幅に広がり、各グループの中から時折り大きな笑い声が起こり、和やかな雰囲気のなか成功裏に催すことができました。

今回の交流会受け入れについては例年のとおり、学年幹事会で対応を協議し、参加者を若干増やし、1グループに女性を加えた現役大学生・現役社会人・大先輩を必ず加え、6グループを構成し対応いたしました。

懇談会の内容も

現役大学生に、受験する心構えと、経験談（失敗談）とアドバイスを

現役社会人には、伝習館又は大学卒業後の就職活動の経験社会人としての心構えと経験、アドバイスを

大先輩には、昔の伝習館の思い出と、人生の大先輩としての経験とアドバイスを

話してもらうことを申し合わせ、実行できた事が功を奏したものと思われます。交流会が終了した後、三宅館長のご挨拶の際にも長時間の交流会であったにも拘わらず最後まで生徒たちは爽やかな笑顔に溢れていました。

去る11月8日に、伝習館の第二学年の指導教諭の中村繁宏主任から交流会で先輩からうけたアドバイスに対しての感想などを生徒たちが箇条書きにまとめたものを送っていただきました。感想文の一部を抜粋して記載させていただきます。

印象に残る話・心に残る言葉として

・仕事に対する「真摯な態度」が何事にも大切である。

・勉強は何かを深く考える力をつけるためにやる。

・「高校時代の友人は一生の友達」

・「努力の量はやがて質に変わる」である。がむしゃらに努力しなければと思った。

・英語を話すことより、正しい日本語を話すことが大切である。

・英語は大切。

・「考える力」を育てるために勉強する。

・積極的に情報を得よ。

感想として

・幅広い年代の人が伝習館と言うことで繋がれるのは素晴らしいと思った。

・留学は日本で英語がべらべら話せるようになるまで勉強してから行くべきだと思っていたので「行けば何とかなる」との話しは驚きました。

・思っていたより堅苦しい感じはなくて、話しが面白かった。

・仕事の話しを聞いて、みなさんが自分の仕事に楽しさや誇りを見出している事が分かった。自分もそう思える仕事に就きたいとおもった。

・伝習館の生徒になったことで、たくさんの人と人との繋がりが出来るんだと感じた。

・大学受験が近いことを意識できたし、「がんばろう」と思った。

・先輩方が私たちや学校のことを大切に思ってくださっていることが分かり、伝習館生でよかったと思った。今の私たちのことを聞いてくださったことが意外だったが嬉しかった。

・高校時代に勉強すること、友情の大切さなどを学んだ。

・自分も東京の大学に進学したいと思っているが、高校の友達と離れて自分1人になりはしないかと不安だったが、このように卒業生で集まる場所があることを知り、少し心強く感じました。

・高校時代の文武両道の姿勢に感動した。

・交流会を通じて一番感じたことは、OBの皆さんの暖かさ、伝習館を誇りに思う気持ちだった。懸命に私たちに何かを伝えようとしてくださる姿は、私達に伝習生としての自覚を改めて引き出してくれた。「伝習館の伝統と歴史」を実感した。自分もいつか伝習館の卒業生として、誇りをもって後輩に何かを伝えられるようになりたいと思った。

以上のように貴重な感想文がよせられて来ました。

副会長　松永　肅

交流会出席協力者　平成22年度

中学55	江崎和夫	高校21	白谷政則		
高校2	江崎正直	23	樋口貴美子		
3	酒井清行	26	原　敬輔		
4	荒井健之輔	28	永岡雅子		
5	松永　肅	32	大山　恵		
12	小野アケミ	32	境　和晃		
12	辻野史朗	35	釘崎佳子		
13	原田万紗子	35	松石香洋子		
14	石橋俊一	37	江口一元		
14	吉田節子	50	平田幸久		
18	福山博彰	51	大曲由起子		
19	高巣和登	51	山田美紀		
大学4年	広松綾香	大学1年	島添賢一		
3	梅崎良樹	1	関　翔子		
3	川口　惇	1	乗富康太郎		
3	大津花絵	1	横山文香		
3	樋口ゆかり		与田ひろみ		
3	廣松浩司	他	学生2名		
3	平川　潤				
3	深町日出海	以上	40名		
3	山田雄貴				

東京に輝ける三稜の星たち
――東京同窓会の歩み――その10

副会長　松永　肅

今回は、故古賀繁一東京同窓会会長の略歴について申し述べさせていただきます。

明治36年4月20日柳川市常磐町でご出生、大正5年柳河尋常高等小学校卒業、大正9年中学伝習館をいずれも首席で卒業後、熊本の旧制第五高等学校にご進学、大正15年東京帝国大学工学部船舶工学科を卒業されました。スポーツも万能で、中学・高校時代はテニスを、大学時代は野球部の投手として活躍されていたと伺っております。

ご卒業と同時に三菱造船株式会社に入社され、三菱長崎造船所に配属になりました。古賀会長が一生で一番生き甲斐を感じられたことは、当時、長崎造船所が世界に誇る大艦69，100トンの戦艦「武蔵」の建造に約10年間建造付主任として携われたことだそうです。

この頃の日本は、世界に誇る巨艦・戦艦「大和」と戦艦「武蔵」の2隻を建造しておりますが、「大和」の艦長は、明治44年中学伝習館第16回卒業の伊藤整一海軍大将で、「武蔵」の建造主任が大正9年中学伝習館第44回卒業の古賀繁一会長という奇しくも母校伝習館が誇る大先輩のお2人であります。

会長は、大半を長崎造船所で過ごされ、所長時代には世界一の規模を持つ百万トンドッグを長崎の香焼に建設され、数年間続けて建造量世界一を達成されました。

このような業績は、中国の李先念国家主席からの江南造船所への技術協力の要請へとつながりこれにも応えられ、三菱グループの協力は現在も続けられております。こうした経緯から登小平氏とはご家族ぐるみの交際を今日も続けておられます。

このような数々の業績を残され、三菱重工株式会社、社長、会長、相談役として90歳を超えても、なお、お元気に三菱グループの総帥としてご活躍になり、更には我国の大企業のトップに立たれ、経済界の先頭を切って訪中して、日中友好に尽力されたり、技術五輪日本組織委員会会長、日本産業訓練協会会長、日本国際貿易促進協会会長、成蹊学園理事長、中央職業能力開発協会会長として、我が国の未来を担うべき人材開発にも大きく貢献されました。

この様に国際的にも偉大な貢献を残された古賀会長も原点は私達と同じ故郷柳川であり、伝習館であります。「自分が現在あるは幼少を柳川で過ごし、母校伝習館で伸び伸びと学んだ賜ものであり、これからはふる里に少しでも恩返しをしたい。」との思いから、柳川小学校創立百十五周年記念事業に際しては、記念事業推進委員会顧問卒業生代表として参画され、柳川市役所新築の折りは多額の寄付をされました。また、私の知る限りでは、北原白秋の生家保存、安東省庵先生の墓地の整備、壇一雄文学碑建立、田中吉政公の顕彰と銅像の建立、三柱神社の欄干の懸替えと銅の鳥居の再建事業など数えあげれば限がないほど協賛しておられます。

また、殊のほか伝習館を愛され、大切にしておられました。昭和46年の3教師の偏向教育騒動の折りも大変心を痛められ、学校紛争正常化を図る目的で結成された「伝習館を守る会」に生徒たちの影響を考えられて積極的に参画され、協賛されております。学校の記念事業におきましても、昭和44年県立移管75周年記念、同53年県立移管85周年、藩校創立155年記念行事、同57年図書館竣工、同58年「三稜記念館」（同窓会館・セミナーハウス）新設工事、同59年県立移管90周年・創立160周年記念事業に伴う募金などに率先して協賛しておられます。この「三稜記念館」・県立移管90周年・創立160周年記念事業につきましては、東京同窓会会長に就任されて初の大仕事でありました。その他、昭和62年の夏、柳川を背景にして環境浄化をテーマにした「柳川掘割り物語」の映写会を、会長のご厚意により費用の一切を負担され、大手町のサンケイホールで同窓会の人達や柳川ゆかりの方々にも広く観賞してもらう為に開催されたこと、平成2年正月には、サッカー部が全国大会初出場を果し、3回戦（ベスト16）まで進出した折も、会長のご意向で母校の同窓会に呼応して、全国高等学校サッカー選手権大会出場東京同窓会後援会を組織して、募金活動と応援態勢を整え、加えて激励会を開催し、闘志を盛り上げ、試合当日には両日とも、1，000名を超える大応援団となったことは、さきの会報のなかで紹介しております。

古賀会長のご趣味の一つの囲碁は有段で、元柳川市町長の古賀杉夫氏がお相手でした。実力も伯仲のご様子で、ある時会長が「そろそろ決着をつけなければ」とおっしゃって、ホテルの一室に篭られたことがありました。また、ゴルフも大変な腕前で、50歳で始められ、シングルまで腕をあげておられます。80歳後半の頃、今でも軽く打っても280ヤードは飛ぶと自慢しておられました。会長が米寿を迎えられた折、「今年は齢の数と同じ日数ゴルフに専念する」と誓われたそうですが、私にご自分の手帳をお見せになり何と1日だけ足りなく悔しがっておられたことが、今も印象に残っております。海外ご出張の折はイギリス・オーストラリア・カナダ・アメリカなど世界各国の有名なゴルフ場で政財界の要人とゴルフ外交も務められていたとのことです。

会長は、長崎で被爆され、湾内をランチで視察中に爆風で海中にたたき込まれましたが、目の前に流木があったため、九死に一生を得られたそうですが、その際、ご家族は全員が爆死されました。ご家族を大切にしておられただけに被爆の体験については、何方にも多くを語られなかった様です。

平成4年1月の「みろく会」新年懇親会の頃から会長の食事が余り進まず心配しておりましたが、3月の例会の時に、ご自身の自動車から「風邪をひいた様なので欠席する」との連絡をうけました。直ぐにお元気になられた様子なので安心しておりましたが、7月の初めに肺炎になられ、そのまま12月4日に享年89歳でご逝去されました。

このような国内外のご功績から藍綬褒章、勲1等瑞寶章を受章され、更には平成2年には陛下から賜杯銀杯を授杯しておられます。

葬儀・告別式は12月7日文京区の護国寺桂昌殿で、12月25日三菱重工業の盛大な社葬が港区芝の増上寺でしめやかに営まれました。

総会をふり返って

高21　白谷政則

『柳川と立花家と伝習館』都会ではないけれど有名進学校ではないけれど、内に秘めた誇り（柳川出身、伝習館出身）を持っている人にとって大変興味深いお話でした。皆さん昨年の同窓会お楽しみいただけましたでしょうか？　二年毎の総会は学年幹事会の承認のもと、還暦前の若手実行委員が準備し当日のお世話をさせていただいております。今思えばあの時こうしておけばよかった、きちんと確認してれば……反省の念と次はもっとうまくいくよう願いを込めふりかえってみます。

《平成20年度総会以降、総会に関する主な事柄のみ記します》

H20　8月23日　学年幹事会

20年度総会の反省と次回への改善案。同窓生の新谷先生の講演なので同期の方やお知り合いの方が多くご出席され、今後もできるだけ母校や地元に縁のある方に講演をお願いできたらいいなぁと思いました。その他懇親会々場の入り口は大きく開き、左右に席順表を掲示し講演会場からスムーズに移動できる様にしよう等討議しました。

H20　11月29日　実行委員会

引継ぎ会兼忘年会。先輩から後輩へ協力のお礼と報告説明。総会当日の準備は二時間、30名以上必要等レクチャーを受け先輩後輩とも親しくなりその後の会合にも多数参加いただき心強く感じました。

H21　2月18日　学年幹事会

総会の毎年開催について討議。総会と学年会（同期会）を交互に行っているという意見が多く、また総会は一年がかりで準備しているので毎年開催は大変だという事で、当分の間今まで通り隔年毎の開催とし数年後また検討する事となりました。

この間、会長・副会長・事務局では日程の調整・講演の依頼やホテルとの交渉等多々お忙しいようです。

H21　8月8日　学年幹事会

平成22年度の総会日程（7月11日）実行委員（高19　20　21）が決定。前回盛会の後だけに大きなプレッシャーを感じる。

この間、アトラクションや物産品の選定など実行委員有志の話し合いを数回。

H22　1月23日　実行委員会

総会へ向けて先輩後輩へ協力のお願いを兼ねた新年会。先輩より当日の役割分担についての資料をいただき助かりました。有難うございます。

H22　2月27日　学年幹事会

総会準備の担当、スケジュールを確認。今年は総会の年なので学年毎に同窓会名簿の再確認を依頼しました。

この間、物産品の検討やお手伝いできる方の勧誘など実行委員同士連絡を取り合っております。

H22　5月8日　実行委員会

30名近く出席し事前準備のスケジュールと当日の役割分担の内容を協議。担当学年と責任者を決め、多くの同級生を誘い準備を進めるよう申し合わせました。

《総会の案内状発送》

この間各担当者は景品・物産品・お土産その他リスト準備。出欠名簿担当は数日おきに事務局と連絡をとり出席者名を入力。（総会前日まで続く）

H22　6月19日　実行委員会

出欠の確認、名札作成。景品、物産品の手配（発注から搬入まで確認）。

H22　7月3日　実行委員会

出欠確認、名札作成、会場のレイアウト

出席者名簿作成準備。

H22　7月10日　実行委員会

最終チェック、出席者名簿作成。受付表

名札その他、明日会場へ持ち込む品物の確認。

H22年7月11日　総会当日

実行委員は朝8時30分ホテルに集合し10時受付開始に向け、上着を脱ぎ全員で最後の準備に取り掛かりました。中には前掛けまで用意している人もいました。

来賓の案内誘導係	1名
案内係	10名
受付係	10名
賛助金受付係	2名
物産品販売係	7名
会計係	3名
土産・配布物係	5名
抽選会係	5名
総務・連絡係	2名

総勢45名は懇親会終了まで何らかの役目を務め、閉会後は全員で名札を回収しお土産をお渡し、また次回お会いしましょうと皆様をお送り致しました。その後も忘れ物落し物が無いか会場を見回り、物産販売責任者は売上の集計、会計責任者は出席者名簿と現金を照合し、全て一円の差異も無く松永副会長にお渡しする事ができて、無事総会が、私達実行委員の役目が終了致しました。

しかし、懇親会最中ビールが終了、ウイスキーも終わりとお酒を楽しみにしていた方には申し訳ありません。ここ数年焼酎ブーム、ワインブームでビール・ウイスキーはそんなには飲まれてなかったのですが、猛暑とハイボール人気（TVコマーシャル）であっという間に無くなってしまいました。見込みが甘かったと反省しております。料理の量も少なかったという声がありましたが入口側にはピラフ等のご飯類は最後まで残っていたようです。

入口側には実行委員の席が多くゆっくり食べる時間が無く余ってたのかもしれません。料理や飲み物の量と種類、席の配置等配慮が足りずバランスが悪く次回への課題とします。余った、足りなかったといろいろ改善すべき点はありますが、何はともあれ二五〇名の同窓生が集

まりホテルグランドパレス二階ダイヤモンドホールは、『のも、かんも、せからしか、ぞーたんのごつ、ばさるー、そげん、ほんなこて、よか』柳川弁のオンパレード。これやったら一人で参加しても、とぜんなかこつはなかヨ！。誰か一人くらい知り合いの又知り合いのおっちやんかおばちゃんのおんなはるくさい！。当日、別の階では国際会議が開かれていたそうですが他の人から見れば二階も外国だったでしょう。しかし我々の伝習館魂は「水の郷」「伝へて習ふ」「星座よ輝け」と歌うにつれ老若男女心は一つになり「白雲なびく」では会場全員最高潮に達した。散会後あちこちで『楽しかった。次も参加します』と笑顔のグループを見ていると同窓会は参加者全員の元気の源であり、私達こそ楽しませてもらい実行委員の一人としてお手伝いできたことを嬉しく思いました。

一寸気になったのが余興をお願いした台所鬼〆さんの落語がよく聞こえなかったことです。皆さんのパワー（大きな声）におされ喋りが本職の落語家さんの方が小さくなっていました。鬼〆さんスミマセンおわびにプロフィールを紹介します。

台所鬼〆（だいどころおにしめ）
本名吉開泰視　柳川市出身
昭和43年生、福岡大学卒業後社会人を経て平成14年31才で柳家花禄へ入門。平成17年二つ目昇進台所鬼〆と改名。そろそろ真打昇進を期待します。皆さんも応援お願いします。

東京の夜は更けで……

表向きは慰労会と称していますが、もっと呑みたい、喋りたい、仲間と一緒にいたい、要するに二次会なのですが皆さん名残惜しかったんですね、伝習館中学卒の大先輩から西山先生と教え子の皆さん……といっても60才過ぎ、実行委員全員、現役大学生まで70名以上集まりここでも大盛況でした。二十歳から八十？歳まで先輩後輩同じ席で楽しめるのも同窓会ならではだと思います。その後もそれぞれ三次会、四次会と続いたグループもあったようですが、翌日の月曜日大丈夫だったのでしょうか？　お疲れさまでした。

遠く触れた故郷、遠い昔の青春時代、同窓会はその差を一気に縮め、柳川に18才に戻してくれるようです。

老……経験と知識
壮……決断と行動
青……柔軟性と若さ

東京同窓会はこの三つの力が繋がりより大きな輪となって成長しているのだと思います。

今回は準備の段階から総会当日まで大勢の方とお会いし楽しい時間を過ごさせていただきました。今後も同窓会と共に私自身も成長できればいいなと思っております。

賛助金のお振込方法

① 同封の郵便振替用紙による
② 銀行振込による
　銀行名　三菱東京ＵＦＪ銀行 銀行コード(0005) 支店名 駒込支店 店コード(061)
　普通預金
　口座番号　１０７３６７３
　口座名　伝習館東京同窓会

いづれのお振込の場合にも必ず回生又は卒業年度をお書き下さい。

平成22年度東京同窓会総会決算報告書

平成22年7月11日　　単位：円

	金額		金額
収入の部		支出の部	
会費		案内状等印刷物発送一式	251,456
男性177名　@10,000	1,770,000	返信葉書受付費用　283件	57,540
女性 59名　@ 9,000	531,000	総会用印刷物他雑費	9,544
学生　4名　無料	0	宴会費（ホテルグランドパレス）	1,973,755
ご招待　5名	80,000	講師謝礼　立花家　落語家	180,000
計245名	小計2,381,000	招待者お土産	15,120
売店売上（郷土物産）	294,700	宴会酒類　売店販売品　出席者土産	324,495
賛助金補填	137,630	振込み手数料	1,420
合　計	2,813,330	合　計	2,813,330

【賛助金ご協力状況報告】

平成22年1月1日から平成22年10月22日まで

卒回	氏名
高1	高石満之
高1	熊本亘
高2	上河京子
高2	池田國彦
高2	田中豊子
高2	大橋貞夫
高2	井坂洋子
高2	徳安朔子
高2	増田則久
高2	松平隆子
高2	北原大薫
高3	近藤宣夫
高3	薗田麗子
高3	臼井ヒロエ
高3	長谷川千枝子
高4	椛島啓之
高4	岩渕邦彦
高5	原タカ子
高5	宮川政實
高5	武田ヤエ子
高5	野口幹彦
高5	岸洋子
高5	高橋絹子
高5	松永悦子
高5	倉林千鶴子
高6	中村充
高6	甲木康博
高6	森清旨
高6	池田勝嗣
高6	森時子
高6	石橋修
高6	井手眞
高6	井手由紀子
高6	古賀祥子
高7	浜野弘子
高7	高田四郎
高7	中園喜久子
高8	樋口綾子
高8	豊島黎子
高8	甲斐田義春
高8	市川玲子
高8	村岡ハルノ
高8	川崎悦子
高8	岩井治子
高9	高口猛
高9	原田光紀
高10	江口武
高10	大島喜代子
高11	山浦素明
高11	秋永栄子
高11	西田孝行
高11	與田広巳
高11	原尻満子
高11	永尾弘行
高12	馬場敦子
高12	深谷悦子
高12	鈴木弘子
高12	田中治子
高12	川上絢子
高13	田中利道

卒回	氏名
高8	森健
高10	東辰子
高10	永倉素子
高11	龍勝
高11	石橋秀男
高11	木下淑子
高11	近藤素子
高13	澤田恵美子
高13	進藤達実
高13	坂田幸子
高15	小河良充
高27	松藤峯成
高31	江頭直行
高32	森永明
協賛1.5口	
女42	寺田ソエ子
中43	中村喜造
女47	板橋久子
中53	高田泰
中55	古賀昭夫
高2	水上富美子
高2	古村イツ
高2	大沢律子
高2	石橋廣孝
高3	冨重眞一
高3	北原瑞夫
高3	酒井清行
高3	西山彰
高3	柳沢一彦
高3	宮崎八代子
高5	家入智恵子
高5	松尾久子
高6	椛島孝之
高6	本間洋子
高7	久良木弘道
高8	與田武久
高8	池田孝人
高8	大村泰生
高10	石橋邦博
高12	横山正和
高13	松本巌
高15	一木克子
高22	梅崎徳孝
高23	竹内幸代
協賛1口	
中50	田辺一彦
中50	三山心栄
中50	広松親弘
中55	小泉祐一郎
中55	馬場淳三郎
中55	吉弘尚正
女31	跡部愛子
女33	木下千遠
女42	遠藤美代子
女42	山口トヨ
女42	富重信子
女45	板井敏子
女46	三小田雪枝
中49	淡輪晋
併女1	川上寿美子

卒回	氏名
高13	吉原時男
高18	加納和則
高30	古賀賢司
協賛2.5口	
中54	永井赳
中55	武藤徳一
中56	成清良孝
女45	幸田主紀子
女46	古賀弘子
女47	作山ミツ
高1	牧野英美子
高2	石崎知見
高4	丸勢正夫
高5	江口政司
高5	福山富士江
高5	近藤正彦
高5	中村裕彦
高6	服部尚子
高7	福山さくら
高7	永江嵩子
高7	野林修
高7	龍弘道
高7	梅崎肇
高8	木下清治
高8	樋口誠佑
高8	川口融
高8	遠藤武雄
高8	真次富久子
高10	大村平人
高11	鶴清三
高11	吉川照子
高11	岡辰彦
高11	江口克子
高12	小野アケミ
高13	原田万紗子
高14	石橋俊一
高14	甲斐昌彦
高14	吉田節子
高14	松岡健次郎
高17	松藤信弘
高18	十時理展
高18	緒方敬四郎
高18	緒方よし子
高18	川口苦楽
高18	中島敏之
高18	松藤由朗
高20	東寛治
高21	西原正道
高22	龍美代子
高23	樋口貴美子
高24	山田直美
高24	大曲雄二
高27	高橋圭介
高27	江崎友大
高32	一木亮之助
高50	河内慎二
協賛2口	
中56	松本一郎
高4	荒井健之輔
高6	友添順策

卒回	氏名
協賛25口	
高2	江崎正直
高5	吉開孝一
協賛15口	
高4	倉本博子
高19	江口吉男
協賛10口	
高2	江頭孝夫
高10	松藤欽一
協賛7.5口	
中54	武藤吉郎
協賛5口	
中46	前原弘
中47	徳永樹夫
中48	宮本弘道
高1	松藤惟
高2	江崎洋二郎
高2	松尾哲夫
高2	江崎洋二郎
高2	小野善睦
高3	新谷弘之
高3	福山諭
高3	杉森亘
高5	安藤祥介
高5	田中起市
高5	岸栄洋
高5	内田栄
高5	津村寿人
高5	松永肅
高6	戸上軍治
高6	木村峯子
高6	荻島直記
高6	杉森陽子
高7	中村将佑
高7	鶴川儀一郎
高9	津留昇
高10	相浦竹年
高10	内山秀生
高11	中村孝子
高12	村上国子
高13	井手寿美子
高13	齋田宗生
高16	椛島正司
高17	三池孝道
高17	福山雅文
高17	跡部與志
高17	跡部與志
高17	武信ヨシ
高18	福山博彰
高18	大津博
高21	白谷政則
高24	酒見和平
協賛4口	
中52	大内礼三
高17	跡部與志
協賛3口	
高3	井口茂樹
高4	今村啓爾
高7	田中敬之助
高8	永倉正彦

卒回	氏名
高32	森　昌伸
高32	咲村　あかね
高38	宮原　修
高45	浦　裕美
協賛0.5口	
女46	佐伯　淑子
高9	岩丸　純芳
高11	高田　晟
高11	原尻　満子
高14	大村　陽子
高23	下田　真知子

（1口　2,000円）

卒回	氏名
高21	千代島　道生
高21	柿野　貴美子
高23	光橋　一美
高23	坂本　智臣
高24	石川　八重子
高27	友清　寛
高28	中島　真二
高30	原野　由美子
高30	橋爪　政男
高31	廣松　珠実
高32	一木　亮之助
高32	加藤　寛樹
高32	釘崎　雄二

卒回	氏名
高17	藤木　清勝
高17	山本　祥子
高17	龍　敏彦
高17	下吹越　智佳子
高18	松尾　二三代
高18	井口　文章
高18	井口　ちづ子
高20	諸藤　由美子
高20	岡　賢二
高20	相見　るり子
高20	近藤　敬介
高20	高巣　和登
高21	古賀　柳治

卒回	氏名
高13	山田　孝輝
高13	西　雅治
高13	尾田　義昭
高13	尾﨑　カツエ
高13	甲木　久美
高13	松本　文子
高14	桜井　幸子
高14	志田　和子
高14	浜尾　叔江
高14	今泉　京子
高15	後藤　民子
高16	坂口　道子
高17	中島　功

伝習館東京同窓会 賛助金通信欄コメント

敬称略

中48　宮本弘道
幹事の方々のお苦労に感謝します。私達の時代は終りましたが、これからの日本國が心配です。

高2　江崎洋二郎
1／8より入院加療中で、直接電話で送付のお礼が伝えられず残念です。本年もよろしくお願いします。

高7　中村奨佑
会報10号楽しく読ませていただきました。
「命！　伝習館」の私です。今後とも、継続と充実を期待しています。

中54　武藤吉郎
伝習館東京同窓会会報第10号誠にありがとうございました。会報10号表紙・表裏の石橋先生の風景写真は素晴らしいですね。又裏の新谷先生の河童の墨絵も力強くていいですね。今回10号も楽しく拝読させて頂きました。江崎会長さん始め編集委員の皆々様に敬意を表する者であります。伝習館東京同窓会の更なる充実とご発展をご祈念申し上げます。

高16　坂口道子
小額で申し訳ございません。ふるさと瓦版は、故郷を想いだすさそい水になっています。ありがとうございます。

高8　樋口綾子
東京同窓会の幹事様御苦労様です。感謝しております。これからもよろしくお願い致します。

高6　戸上軍治
会報誌ありがとうございます。記念すべき10号に相応しい充実した記事が満載で、同期の岡田・木村の両氏には奮起を促されました。

高6　森　清旨
会報10号いただきました。江崎会長初め役員の方々にはご多用のなか、同窓会運営にご尽力いただき深く感謝致しております。会報の内容も益々充実して何度も読んでいます。今后共よろしくお願い申し上げます。

高17　福山雅文
2008年の東京同窓会に出席し初めて同窓会の存在を知りました。本年度の学年幹事を仰せつかりましたのでよろしくおねがいします。

高23　下田真知子
いつもありがとうございます。毎年福岡に帰りますが、今は聞かない方言にであい楽しく読ませてもらっています。

高7　永江嵩子
柳川と横浜を行き来しながら、元気に楽しく生活しております。

高19　江口吉男
今度は同窓会報を送って頂きありがとうございました。江崎会長様に於かれましては同窓会発展の為の御活躍祈念致します。

高16　椛島正司
福岡県理数オリンピックで伝習館が、附設、修猷館についで3番、嬉しいニュースです。

中55　武藤徳一
会報も10号迄夫々見事に完成し関係各位のご努力に感謝、引き続き各学年幹事を通じて協賛参加率の改善向上を切望します。

高11　中村孝子
父故山崎年夫（中36）白寿で2001年1月に旅立ちました。柳川の両開から孫の子守りのため三鷹市に移り住んで35年になります。江口三千雄前東京同窓会長と同期で、東京同窓会総会や、サッカー全国大会にもかけつけていました。

高女47　作山ミツ
皆様御忙しい中から発行して下さり、本当に有難うございます。益々在京の同人が結束して楽しい集いとなりますよう祈ってます。

高15　一木克子
石橋敏男先生の表紙写真なつかしく拝見しました。

中50　廣松親弘
第10号会報楽しく拝読しました。編集の皆様のご苦労に感謝し、さらなる同窓会の発展を祈念致します。
東京同窓会には健康上遠距離歩行が困難であり残念ですが欠席します。

高12　村上国子
春は里山を歩こう。夏は山に登ろう。秋は芸術かぶれになり冬は流氷を見に行こう。でも……四季はあっという間に通り過ぎる。ゆっくり歳をとりたいと思う。

高7　野林　修

東京同窓会会報大変なつかしく楽しく読ませていただいております。ここ数年伝習館高野球部ＯＢ会に出席しております。

高4　倉本博子

未だに現役で国内外を東奔西走の日々を過ごしております。毎年きちんと賛助金をご送金せず失礼しています。些少ですがお納め下さい。ご編集の皆様に敬意を表し会のご発展をお祈りいたします。

高10　大村平人

暮に友人から「柳川カレンダー」を頂きました。

このようなカレンダーがあるとは知りませんでしたが白秋の詩と共に高畑公園の松月・欄干橋、川下りなど景色を見ながら故郷を懐かしんでいます。

高女42　富重信子

立花いこいの森公園の桜のお話ありがとうございます。行ってみたいと思います。今年は咲いたでしょうか。

高18　十時理展

会報が届くと柳川は、ねこ柳のビロードの芽がふきしだれ柳の新緑が川面に映える春が思い出されます。

高3　酒井清行

昨年の生徒との交流会で高4回生の渡邉喜亮氏から、酒井さんの活躍した水泳部の全国大会優勝の記事（創刊号17頁～）を生徒に配布することを推められました。次回から実行する積りです。あのような全国№1は簡単に達成できるものでなく、素晴らしい快挙で、知らしめ誇りとして母校の名誉なりますとのありがたいおすすめであった。

高3　宮崎八代子

この度の東京同窓会では、立花家御家族皆様のご出席があり、貴重なお話がお聞き出来ました。何よりも半世紀ぶりに懐かしい方にお会いし、故郷の香りに包まれた素晴らしい会で感謝で一杯でした。お世話になり有難うございました。

高8　宮崎　肇

東京同窓会の発展をお祈りします。H22年の同窓会を楽しみにしていましたが急に体調不良になり欠席しました。残念。

高10　内山秀生

10回生の皆さん賛助金へのご協力よろしくお願いします（タノムバイ!!）

伝習館東京同窓会決算収支報告書

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで　　単位：円

科　目	金　額	科　目	金　額
収入の部		**支出の部**	
普通賛助金（郵便局）	1,183,000	会報制作費一式（10号）	781,200
普通賛助金（銀行）	33,000	会報送料一式（10号）	220,490
普通預金利息	13	伝習館同窓会広告料	40,000
		同窓会事務経費	35,041
		修学旅行交歓会交通費	7,000
		ホームページ費用	54,600
		印字サービス料	2,100
		再発行受払通知票	1,000
		郵便振替手数料	28,190
当期収入	1,216,013		
前期繰越金	2,521,887	当期支出	1,169,621
内定期預金	(1,600,000)	次期繰越金	2,568,279
計	3,737,900	計	3,737,900

次期繰越金内訳	
繰越郵便貯金残高	912,490
普通預金残高	40,864
定期預金	1,600,000
繰越預金残高	14,925
計	2,568,279

総会講演要旨

柳川と立花家

立花家17代当主　立花宗鑑

はじめに

つい先日、58回目の白秋祭の船に乗船してきました。私はほとんど毎年東京からお客様をお誘いし、一緒に白秋祭の船に乗ることを続けておりますが、このお祭りに参加するたびに、柳川とはなんと素晴らしい町だろう、ここを郷里とすることの喜びと誇りを感じています。この気持ちはお客様にも通じるらしく、市民総出で、手作りのお祭りを作り上げ、郷里が生んだ白秋先生を讃える行事を続けていることに対し、お祭り自体の素晴らしさとともに、有名な詩人、文豪は数多く存在するが、このように郷里でその作品に子供のころから常日頃親しみ、讃え、また次の世代につないでいく地方は柳川しかないのでは、と皆さん感心されます。

このような素晴らしい郷里に、初代藩主立花宗茂から途中20年のブランクがあったとはいえ、423年も立花家が続いていることに対して私はご先祖に感謝する気持ちでいっぱいです。

自分の先祖について自ら書くことは自慢話にもなりかねないので、なかなか難しいのですが、いつかは宗茂を大河ドラマの主人公にして、柳川をPRしたいという気持ちも込めて紹介させていただきます。

武将としての、道雪、紹運、宗茂

御承知のこととは思いますが、宗茂は高橋紹運の長男として1567年に生まれ、戸次道雪にみこまれ、是非にということで、14歳の時に道雪公の養子となり一人娘の誾千代姫の婿になるわけです。

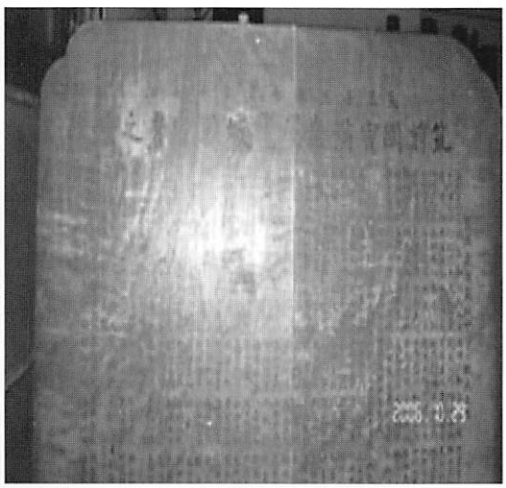
白虎隊で有名な会津藩の藩校で武士の子弟が学ぶ日新館童子訓という教科書があります。武士はいかに生きるべきであるか、という心構えを10歳ごろからの子供たちに植え付けるために第五代藩主松平容頌が編纂したものですが、このなかに武士の鑑として戸次道雪と高橋紹運の二人の父親が取り上げられています。

道雪公は脚が不自由でもあったに関わらず、戦いの戦略に優れ、戦場では輿に乗り陣頭指揮をとった武将として有名です。教科書では〝武勇たくましく士卒に接する態度は、親が子に接するがごとし〟として、上に立つものの部下への心配りと接し方はかくあるべしという智と情を備えた理想のリーダーとしてのエピソードがいくつか取り上げられています。

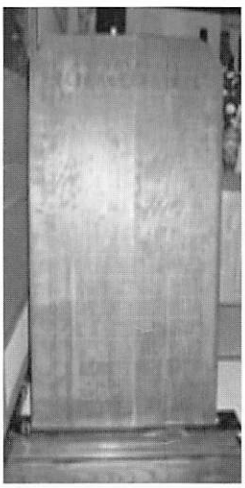
また紹運公は、岩屋城で、島津勢の大軍を相手に、数度の降伏勧告をはねのけ、七百数十名の部下とともに壮烈な最後を遂げるのですが、この時期は紹運が仕える大友家はすでに命運が尽きる寸前でした。しかし〝国衰えても義を守って節を変えず〟

〝君君足らずともよく臣節を尽くしてこそ真の武士であろう〟として、降伏を断り義に殉じ城を枕に討ち死にするわけですが、この態度こそが武士の鑑であるとして取り上げられています。良い悪いは別にして、鶴ヶ城に籠城した会津藩士の戦い方の原点にこの教えがあったのでしょう。

教科書が編纂されたのは1804年で、紹運、道雪が亡くなってすでに200年以上を、経ています。200年後にも取り上げられているということは、いかにこの二人が武士の鑑として語り継がれてきたことの証でもありましょう。



大位牌上部に筑前国寳満、巌屋籠城戦死者之霊とある



大位牌

さて、立花宗茂については、数多くの単行本がでたり、雑誌に書かれたりしておりますので、特にここでは、多くに触れることはいたしません。

ただ、もし宗茂が、大津城を攻めていないで、関ヶ原の戦場に参戦していたら勝敗の結果はどうなっていただろうか、という想像される方が相当おいでになるということは、極めて戦上手な魅力ある武将であったことは間違いありません。

それに加え、外様大名で、西軍に付きながら、徳川幕府の将軍秀忠、家光の御伽衆として取り立てられ、〝当代御噺衆12人の第一にて、ご待遇なみなみならず〟（徳川実記）といわれるほど、気に入られていたのは、単に勇猛武将であっただけではないはずです。

勇猛な武将としては関ヶ原の戦いで豊臣家恩顧の武将でありながら東軍として戦い、報償として多大な領地を与えられた、加藤清正、福島正則がいますが、数十年後にはいずれも改易されていることからみても、秀吉から1587年に与えられた領地に、関ヶ原から20年後に戻された、宗茂という人物は人間として大変魅力的な人物であったのでしょう。

柳川藩（立花家）が明治に至るまで同じ土地に存続しえたことは、まさに藩祖宗茂公の魅力によるものではないでしょうか。

明治維新を迎える

慶応3年の大政奉還、4年の戊辰戦争を経て、明治2年には版籍奉還が行われ、全ての大名は領地の支配権を天皇に返上し、その地方を領地としてではなく、行政官として管理する藩知事に任命され、また華族制度も作られました。

明治4年には、廃藩置県が実施され藩知事の職務も解かれ、旧藩主は東京に移住するように命じられます。その最後の柳川藩主は12代立花鑑寛でした。鑑寛と正室純姫（田安徳川家より御輿入れされた）は、柳川に住んでいましたが、東京に移住することになります。

しかし、鑑寛は明治7年には家督を18歳の寛治に譲り柳川に戻り、現在の御花に隠居します。したがって明治の大変動を乗り切ったのは寛治でした。

経済的にも江戸時代の江戸屋敷は維持不可能になり、下屋敷は処分、16，000坪あった上屋敷（下谷西丁、現在の東上野）は縮小されます。ただ、縮小されたとはいえ、一般に比べれば広大な屋敷でありましたので、その敷地内に旧柳川藩出身の政財界人、学生などで構成される柳河学友会という親睦団体の建物と寄宿舎がのちに作られました。

この旧上屋敷は私の祖父、母が学習院時代に住んでいたところですが、終戦後に財産税などの支払いに充てるために残念ながら処分されました。

寛治は明治政府に柳川に移住する許可を求め明治22年には、柳川に戻ります。

記録によると各家は国旗を掲げ、旧家臣をはじめ、消防団員、学生など多くの人々に歓迎されたとのことです。寛治は明治23年には貴族院議員に選ばれ、2期14年努め議会が開かれている期間は東京に住むことになります。

柳川では中山に農事試験場（現在は〝立花いこいの森〟になっています）を作るなど農業振興に力を入れるとともに、教育面では伝習館の前身である橘陰学館に運営費を寄付し、最終的にはその運営も引き受け、その時に名前を私立尋常中学伝習館と改めています。

伝習館が県に移管された後も寛治は毎年寄付を継続し、旧柳川藩出身者のための奨学資金団体の橘陰会にも毎年寄付を行っていました。

上屋敷は下谷西町16000坪現在は東上野一丁目

母は私の曾祖父にあたる寛治について、大変真面目で、体に悪いと言って、酒もたばこもやらず、趣味は狩猟、ビリヤード、ただ、結構おしゃれだったようで、中山の農事試験場へ行く時は馬に乗って、胸のポケットには赤いバラを挿していたと言っていました。

良き大正、昭和時代

私の祖父鑑徳は道雪公を初代とする立花家15代になりますが、第二次大戦前までは、当時の写真などを見ても経済的にも安定していたようで、大変優雅な様子がうかがえます。特に一人娘の母は、鑑徳の方針もあり、何しろ体を鍛えろということで、テニスに熱中し全日本のチャンピオンなるまで腕をあげていました。残された写真をみると、当時の有名なテニスプレイヤーが度々柳川のテニスコートに集い、母とプレーしている姿が写っています。多分、鑑徳は彼らにとってはパトロン的な存在だったのでしょう。母も後年、テニスをやっていた頃が一番人生で楽しかったとその時代を懐かしんでいました。

終戦後

昭和12年に生まれた私は立花家にとって久しぶりの男の子でしたので、祖父は養子である父（日露戦争の時の海軍参謀長である島村速雄の二男）に任せるより自分のもとで育てたかったようで、小学校に入学する前の2年ほど北海道旭川にいる両親から離され、柳川へ引き取られました。

柳川では、祖父に狩猟、投網、蜘蛛手網、船の漕ぎ方、などを仕込まれました。

食べ物の好き嫌いを言うな、挨拶をしっかりしろ、など行儀については厳しい祖父で怒られると内倉に放り込まれることなどありましたが、どんこ舟を竿で操れるのも、投網が打てるのも全て祖父が教えてくれたことであり、私にとっては、大変懐かしい祖父です。

大牟田の上内にみかん園（橘香園）を開いたのは祖父で、このみかん園が立花家にとって、唯一の収入の道だった時代もあります。

昭和20年の終戦の年は小学2年生で父（当時の帝室林野局の技官でした）の赴任地である旭川の青雲小学校に入学しており、その年に父は木曽福島に転勤になりましたが、私だけが再び柳川の祖父、祖母のもとに預けられ、小山田先生が校長をされていた城内小学校に入学しました。城内小学校には昔祖父も通っていたようですが、当時の先生方にとっては、立花家の子供を初めて迎えるということで、大変緊張されたということを後に伺いました。

私は私なりにきちんとせねばという意識もあったのでしょう、祖父に仕込まれたように背筋を伸ばし、まっすぐな姿勢で一番前に座っていたので余計緊張したようです。

華族制度が廃止になり、農地改革が実施され、立花家は収入の道がほとんど途絶えました。祖父はこの事態は俺では対処出来ん、と思ったのでしょう、自分は隠居し、父和雄が、急遽柳川に呼び戻さ

れました。

ちょうど、明治維新に、当時の藩主、鑑寛が、隠居し家督を寛治に譲ったのと同じ事態です。祖父鑑徳もその時のことが記憶にあったのかもしれません。

ここから、父和雄、母文子の苦労、奮闘が始まるのですが、財産税はかけられるは、隠居に伴う相続税も支払わねばならない、ということで、私の記憶でも、現西洋館の家具類に差し押さえの赤紙が貼られていたことを覚えています。

ここら辺の詳しいことは、和雄著の〝柳川の殿さんとよばれて〟に書かれていますが、私の実感としても、〝ものはあったが金がない〟（これは現在でも同じことですが）時代でした。

例えば、朴歯の下駄を買おうにもお金がないので、しょうがなく、家にある桐の下駄を履いていたとか、ビー玉の替わりに置物に付いていた水晶玉をはがして遊んだ、鉛筆削りに小柄を使ったとか、今考えると全く無茶なことをしていました。

ただ、言えることは、父が養子だったことで、養子が立花家をつぶしちゃいかん、という頑張りとそれに附いて行った母の楽天主義が、御花という商売を始めることになり、現在まで持ちこたえられた原動力になっていると思います。当時は、柳川を処分し、東京の江戸屋敷を拠点とする選択もあったようですが、（多くの大名家が拠点を東京に移していました）父としては、先祖から伝わり、家臣達が懸命に守ってくれた道具類、そして由緒ある御花畠は絶対に守るのだという覚悟が出来ていたのでしょう。

また、父がよそから柳川に来たということも、柳川の良さを人一倍感じとれることになったのかもしれません。私から見て、両親は大変に困難な時代を生きてきていますが、まなじりを決してとか、悲壮な覚悟とかいう感じは全くしませんでした。

常に地元の絵描きの小野南枝さん、音楽家の高椋さん、あるいは、文士の火野葦平さん、檀一雄さんなど御花においでになる文士の方々と楽しそうに酒を酌み交わす遊び心に満ち満ちていた父親という印象です。

詩情豊かな柳川は、白秋のような詩人、芥川賞作家の長谷健、直木賞作家の檀一雄などの文士を輩出しており、文士の皆さんと語りながらお酒を飲むことが、大変父にとっては、楽しいことだったのでしょう。

ちなみに、立花家の菩提寺である福厳寺には、長谷健、檀一雄の御墓があり全国で唯一の芥川賞、直木賞両作家の眠る御寺だと父が良く言っていました。

現在の白秋祭の原型も、小野南枝さん達と飲んでいるときに、白秋さんの命日の前夜祭として上野の二科展の前夜祭みたいなもの（ビール樽を担いだパレードだったようです）をやろうではないか、ということになり、単なる提灯行列ではつまらない、どんこ舟を使って船での提灯行列だということで、遊び半分で始めたことが、きっかけになっています。

地域とともに

かつて、大名家が所有していた歴史的な建物、御道具類などは、明治維新の大変動の時代にかなりが処分、散逸し、その後再び終戦後に更に、散らばってしまいました。

また残る建物も、多くが維持するのが困難なため私的所有から、市、県、国などに売却されています。これらの建築物は入館料を取っていても、とても維持費を賄えるものではなく、多くは、税金により維持されています。

柳川の御花には歴史的史料である御道具類、文書類（立花家文書、伝習館文庫は大友文書とともに重要文化財です）もかなりがまとまって残されており、建物、庭園も幸い主要な部分は、かつての姿をそのまま残しています。

地域とともに、を言い続けた父は、これらを、立花家として維持していくことが地域貢献のための立花家の責任であると、考えていました。

父は〝柳川藩や、立花家に伝わる歴史的資料、文化遺産は地域の共有財産である。そして御花は文化の発信地である〟ことを念頭にこれらを残していく手段として（株）御花を経営していったのです。

私は直接御花の経営にはタッチしていませんが、父のこの気持ちを我々兄弟全員が受け継ぎ、地域とともにある、立花家、そして御花を次の世代に残していきたいと思っています。

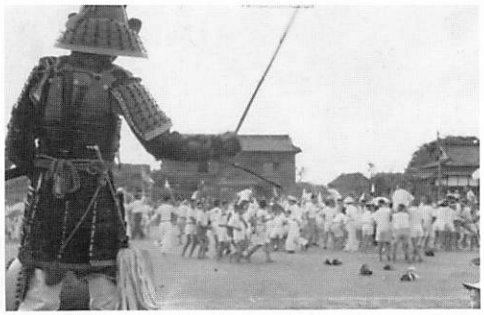
私も柳城中学までは柳川でしたが、生活基盤が柳川から離れて、長くなり、外から柳川を観る立場になりました。

外から観ると、柳川は立派なブランドと活用可能な資源を持った街です。

水郷を中心としそれを交通などに活用したエコの街づくりにより、エコシティとして、売り出すことも出来るでしょう。武家屋敷を保存し活用することにより、特色ある宿泊サービスも提供出来るでしょう。川下りコースのところどころに、白秋の合唱、琴、あるいはピアノの練習の音が流れてくるような設備を作り、訪問されるお客様に更にゆったりとした情緒を味わっていただくことも出来るでしょう。

ちょっとオーバーですが、全世界の人

中学まで柳川で過ごしました



柳城中学での騎馬戦

が一度は訪ねてみたい柳川という魅力を磨いていってほしいと思っています。

藩校　傳習館

17回卒　安東省菴顕彰会
立花民雄

2010年5月、柳川市と中国

浙江省余姚市との間で「観光文化友好交流都市」の締結調印式が、余姚市で両副市長によって行われました。

柳川と余姚との関係は、柳川藩学問の祖といわれる安東省菴と「千古の美談」の相手、朱舜水の出身地です。奇しくも今年は、舜水と省菴が長崎で始めて会った時から350年の記念すべき年に当たります。

安東省菴と朱舜水

中国の明から清に変わろうとする時、朱舜水は、国姓爺合戦のモデルとなった鄭成功らと明国救済に奔走し、何度も日本に救援を求め長崎に寄りました。ついには、明国滅亡が避けられなくなると、舜水は、母国を捨て長崎に流寓します（1660年）。かねてより文通のあった省菴は、朱舜水に師事すると共に、先生を支援します。省菴の禄は200石（実米80石）と裕福とはいえない生活ですが、自分の禄の半分を裂いて師の窮乏を助けます。省菴の生活も大変厳しいものでしたが、豊かな師弟関係で学問が非常にすすみ、舜水が後に水戸光圀から招聘されるまでの6年間を支え続けました。まさに清貧の行いです。

舜水東上の折、柳川省菴宅により惜別のなか謝意を述べ、孔子像三像のほかを託します。現在も、安東家、故あって東京湯島聖堂（旧昌平坂学問所）、そして、伝習館にその孔子像が伝わっています。

省菴と傳習館

安東省菴に始まる家塾は侗菴、仕学斎、間菴、仞山、節菴と引き継がれていきました。七代藩主鑑通のとき間菴に命じ、稽古場、聖堂を本小路に建て、八代鑑寿に引き継がれ、九代鑑賢の時（1824年）節菴を召し「傳習館」と命名しました。論語の「伝不習乎」（習わざるを伝へしかと）が出典です。最高責任者に安東節菴を教授とし、牧園茅山（亀井南冥門弟）が助教、横地玄蕃助が学監に就任しました。

このように安東家は歴代柳川藩の学問にかかわり、伝習館の生い立ちも、省菴の家塾に起因するといっても過言ではありません。

省菴の学風は舜水の影響を受け、朱子学一辺倒ではなく、自由な古学が柳川藩の学風であったようです。しかし、1790年の異学の禁により朱子学が採用されます。

現在も、藩主直筆の扁額「傳習館」、朱子の学規「白鹿洞書院掲示」に藩主が自ら加筆したので「伝習館掲示」とも呼ばれる教育の基本方針が玄関に掲げられています。

こうして創立された藩校傳習館も、熊本横井小楠系の実学派、立花壱岐を中心として対立を幕末に起こりますが、明治維新となり藩校の終焉を迎えます。

傳習館と立花家

明治になり、文武館、啓蒙社、称平校（伝習小学）などめまぐるしく呼び名が変わったようですが、まがりなりにも続いていた山門郡町村立の中学伝習館は1886年（明治19年）学制改革と学校令（各県一校）によりまたまた廃校となります。中学校進学を閉ざされたため、子弟教育は重大問題となり、私立の中学校「橘蔭学館」が橘蔭学会という組織で立ち上げられます。この組織は、立花家と賛同者による寄付金で運営されました。また、この呼び方は、立花家のお蔭という意味もあったようです。

やがて、橘蔭学館は学園騒動が起こり、運営母体まで分裂する事態となり1892年（明治25）年、学校運営のすべてが立花家に移管され、私立尋常中学傳習館として再スタートします。明治27年には福岡県立と冠が変わりますが、実際の県費で運営されるようになったのは、明治34年のようで、それまでは立花家による運営でした。そして、明治34年、このとき福岡県立中学伝習館と改められました。

明治34年以降、立花家は旧藩出身者に対して奨学資金団体「橘蔭会」に毎年の寄付が終戦まで続きました。また今日、その一部が関係者の大変なご尽力で、同窓会館「三稜会館」の建設にあてられました。

期待をこめて

さて今日、大変不愉快な反日活動が中国で起きていますが、否が応でも隣国中国とはお互いにその文化を理解しあう関係にならないと解決しません。残念ながら、今日では中国から日本への大学留学が少なくなり、大半が米国、英国、ロシアになっています。相互理解は若い方々の交流がもっとも大切な事と思います。

柳川市と余姚市の交流締結の意義は、「安東省菴記念館」ともいえる伝習館と、余姚市の学校交流が実現すれば、まさに「千古の美談」の花を咲かせるように思います。

最後になりますが、安東省菴顕彰会では「省菴子ども塾」を開講して6年目に入ります。小学校低学年生が、白文の論語や漢詩、また省菴の柳川八景など姿勢を正し、みんなで声をそろえ、大きな声で素読をしています。これに刺激されたのか、要望があり、今秋から大人の「省菴塾」が開講されます。是非、顕彰会にもご入会いただき（年会費2000円）、ご支援、ご鞭撻をお願いいたします。

お知らせ
―追悼立花文子さま―

昨年七月の「伝習館東京同窓会総会」にご来駕され、車椅子ながら元気に登壇されてご挨拶されました立花家の満百歳のお姫様立花文子（あやこ）様がお亡くなりました。

謹んで皆様にお知らせし、ご冥福をお祈り申し上げます。

皆様ご承知の通り文子様は十五代鑑徳（あきのり）公のお姫様で、今や柳川観光の目玉になっている、料亭「御花」の創業者です。

色々とご苦労の末、柳川観光の基礎を築かれた一代の女傑でした。（詳しくは著書『なんとかなるわよ』をご一読ください。）

同窓会では車椅子ながら壇上に上がられ同窓会員の盛大な拍手に応えられていました。お元気そうに見えたのに残念です。

合掌

立花祇園守の紋

料亭旅館御花創業者 立花文子さん死去 100歳

柳川市の料亭旅館御花の創業者で御花名誉会長の立花文子（たちばな・あやこ）さんが十四日午前三時四十七分、腎不全のため東京都内の病院で亡くなった。百歳。

通夜は十五日午後七時から柳川市新外町一の御花対月館で行われる。葬儀は故人の生前の意向で近親者のみの密葬で営まれる。お別れ会が二十六日午後四時から同八時まで、御花松濤館で行われる。喪主は長男の宗鑑（むねあき）氏。自宅は柳川市城隅町二二の五。

立花さんの父は旧柳川藩主立花家十五代伯爵の鑑徳氏、母は江戸幕府十五代将軍徳川慶喜の孫の艶子さん。昭和十年、島村速雄男爵の二男和雄氏と結婚。

昭和二十五年、和雄氏とともに御花を創業。自ら調理師免許を取得し、持ち前の積極性と明るさで素人おかみとして奮闘した。国際ソロプチミスト柳川と柳川商工会議所女性会の初代会長を務めた。

子どものころからスポーツに親しみ、昭和五年には全日本テニス選手権ダブルスでチャンピオンになった。華道や茶道、俳句の各分野でも活躍した。

▶有明新報より

ちくご川

旧柳川藩主・立花家の文子（あやこ）さんが享年100の天寿を全うし14日、永眠した。明治43年の生まれ。父は立花家15代伯爵・鑑徳。母は将軍徳川慶喜の孫・艶子。20歳の時、全日本テニス選手権ダブルスで優勝している。5年後、男爵の子・島村和雄氏と結婚。和雄氏は立花家の養子になり、そのいきさつは自伝「柳川の殿さんと呼ばれて」に詳しい。平成6年、86歳で死去。文子さんにも自伝がある。そのタイトルが多くの人を励ましたと思う「なんとかなるわよ」（海鳥社）だ▼大牟田市と高田町の境に黒崎という有明海に突き出した岬がありました。父が漁に出る時に寝泊りできるようにと別荘を建てたのです。長女佳代子が小学生だった頃、ピアノの先生が「娘が貝を拾いたいと言うんです」とおっしゃるから私の運転で黒崎に出かけたことがありました。そうしたら何と海は埋め立てられてしまい、そこをトラックが走っているじゃありませんか。びっくりしました▼高田町（みやま市）は有明海からずいぶん離れたところに「岩津」の地名がある。海に岩が突き出た景観をよく表している。瀬高や山川の山が近いのに「海津」という地名もある。古代はそこまで海が迫っていた証拠だ。文子さんの自伝を読み「ああ、黒崎は海だったと聞いていた」と思い出した。今、さらに西（海側）を有明海沿岸道路が走る。この光景が、文子さんは天から見えるだろうか。

▲ちくごタイムスより

東京同窓会での文子さま
三女　季代子さま
長女　佳代子さま
次女　万紗子さま

母校だより

伝習館高等学校館長　着任挨拶

館長　三宅清二

本年三月、定年退職をされました合原長俊館長の後任として、大牟田北高等学校長から伝習館第三十八代館長として着任いたしました三宅清二と申します。どうか、よろしくお願い申し上げます。

東京同窓会の皆様には、日頃より母校伝習館に対しご支援を賜りありがとうございます。また、先日は、本校二年生の東京修学旅行の交流会におきましては、後輩達への心温まるご支援やご助言をいただき心より感謝申し上げます。生徒達はこれからの進路に対し大きな示唆を頂きました。

また、生徒達は、東京という日本の政治、経済、文化の中心地で頑張られている先輩方が、青春時代の学舎である母校伝習館を誇りに思い、伝習館で育んだ友情を大切にされている姿を見て、伝習館で学ぶことのできる幸せを感じておりました。

高校生という時期は、人間が精神的にも肉体的にも大きく成長していく、まさに疾風怒濤の時代です。私は、生徒達に勉学に部活動に励むと同時に、生涯にわたって付き合いのできる友人を作って欲しいと願っています。

今後、伝習館の館長として、三稜の校章が示すように、知性だけでなく、「知・徳・体」の調和のとれた、まさに、同窓の先輩方のような社会に有為な人材を育てていく所存です。

最後になりましたが、東京同窓会の益々のご発展と同窓の皆様のご健勝を心より祈念申し上げともに、母校伝習館へのご支援ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

全国に伝習生の桜咲く

進路指導主事　川口勝久

「遠大な志　目前の一歩」。本校は生徒一人ひとりが高い目標を掲げ、その実現をいかに図るかという方向で三年間を過ごすことになっています。学習と部活動を両立させ、自立心の強い人間になることで結果的に進学においても素晴らしい成果をあげています。

今春の大学入試でも、京都大学３名、大阪大学５名、九州大学15名をはじめ、一橋大学・東北大学や早稲田大学・慶応義塾大学・上智大学など全国の国公立や有名私立大学に多数の合格者を出しています。

これも同窓生の皆様が社会人講演会や東京修学旅行での交流会などの機会を通じて、生徒に大きな夢と高い志を持たせてくださったおかげであり、この場を借りて御礼申し上げます。今後とも、同窓会の皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年３月進路実績　国公立大志望者の70%が現役合格！

（　）内の数字は合格者人数

国公立大学合格者　140名

東北大（1）	一橋大（1）	東京外国語大（1）	京都大（3）	大阪大（5）
神戸大（1）	九州大（15）	東京医科歯科大（1）	筑波大（2）	横浜国立大（1）
愛知教育大（1）	岡山大（2）	広島大学（8）	山口大（4）	九州工業大（2）
福岡教育大（6）	佐賀大（28）	長崎大（14）	熊本大（16）	宮崎大（1）
鹿児島大（5）	琉球大（1）	国際教養大（2）	首都大東京（2）	北九州市立大（5）など

私立大学合格者　430名

早稲田大（3）	慶応大（3）	上智大（2）	青山学院大（5）	明治大（4）
東京理科大（16）	同志社大（21）	立命館大（35）	関西大（8）	関西学院大（6）
西南学院大（65）	福岡大（115）	など		

準大学校合格者　1名

防衛大学校（1）　〈1次合格者　55名〉

公務員合格者　6名

国家Ⅲ種（1）　福岡市役所（1）　みやま市消防（1）　海上保安（特別）（1）
陸上自衛隊看護学生（2）

先輩・後輩より

顕彰　廣松渉

中56　成清良孝

画竜点睛を欠く『やながわ人物伝』

平成二十一年三月に、柳川市と柳川市教育委員会の編集で、「柳川市郷土学副読本」というサブタイトルの『やながわ人物伝』が刊行された。

中世から現代にわたって柳川が生んだ学者、詩人、小説家など、二十人を選んで、その生いたちや業績を紹介している。読ませたい年齢層は小学校高学年から中学生までを想定している。

採りあげた人物は、近代では藤村作、北原白秋、長谷健など九人。現代では檀一雄、菅原杜子雄、木村緑平の三人。

この中でこともあろうに廣松渉（一九三三～一九九四）が欠落している。

どういう基準で二十人を選び、世界的に著名な廣松渉を欠落させたか、よくわからない。

わたしなりに推測してみると、一つは編集委員たちが、廣松渉の存在や業績を、よく知らなかったからではないか。

二つ目は、反体制の知識人に対して、その人がどんなに世界的な業績をあげていようと、決して認めようとしない、地方の精神風土の特徴があげられる。

しかし、廣松は若い頃はともかく、十八年間にわたって、東京大学助教授、教授を勤めあげた。「反体制」のレッテルを貼ること自体が、むしろ滑稽でさえある。

そのどちらでもないとすれば、廣松を欠落させた理由はいったい何であろうか。

『広辞苑』（岩波書店）は、「ことば辞典」としてばかりでなく、「小百科事典」としての役割を兼ねていると言われる。当然、東西古今の人物紹介もあり、廣松渉も載っている。

『やながわ人物伝』の近代・現代に名前が出ていて、『広辞苑』に紹介されているのは、藤村作、北原白秋、檀一雄の三人だけだが、廣松渉の紹介分量は、藤村作や檀一雄を大きく抜き、北原白秋と堂々肩を並べている。

廣松渉の業績

一九七四年、廣松渉四十一歳の時、マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』を新しく翻訳編集しなおして刊行。（河出書房新社刊）俄然世界中の学会から注目された。

『ドイツ・イデオロギー』は唯物史観生誕の書と言われる。マルクス、エンゲルスの若き日に書かれた未完の遺稿であるが、その草稿がばらばらで、後世の学者によって、かなり恣意的に編集されたため、これまで本然の姿と違うではないか、という疑問が長い間くすぶりつづけていた。

廣松は抜群のテクスト・クリテークによって、ほぼ本来の姿に復元した。ちなみにテクスト・クリテークとは、古典などの定本を決定するため、原稿、写本、すでに刊行されている諸本などを校訂・研究することをいう。

廣松はマルクスやエンゲルスの自筆原稿の筆跡なども丹念にチェックしていったという。

ドイツ語圏の学者もなし得なかった偉業であろう。

廣松が中学生の段階で、思想や読書の面で多大な影響を受けた三年先輩の宮川武寿は、「廣松は数学や物理はよくでき

東武線車内で

たという印象はあるが、語学の能力がこれほどとは思わなかった。」

と舌を巻いた。

廣松が残した膨大な学問的業績について、浅学非才のわたしでは、とても紹介できない。興味のある方は『廣松渉著作集』（全十六巻、岩波書店）をご覧になるといい。

廣松独自の哲学も『存在と意味』（岩波書店）の大著二冊に結実している。廣松の名古屋大学時代の教え子小林敏明氏（現在ドイツのライプツィヒ大学東アジア研究所教授）の文章によって、そのアウト・ラインを紹介する。

多彩な理論活動の中でも、とくに認識論の分野で早くにうちたてた「共同主観的四肢構造」の構想は他の諸分野をつなぐ原理論のような働きをしているが、これは廣松のライフ・ワークともいうべき『存在と意味』という大著となって結晶している。

（『哲学者廣松渉の告白的回想録』）

早熟な天才少年

廣松渉は一九三三年（昭和八）八月十一日、父　廣松清一、母　禮子の長男として、山口県に生まれている。

清一は福岡県三潴郡蒲池村の出身。（蒲池村は一九五五年、柳川市に合併）県立中学伝習館から現在の北九州市にあった中堅技術者養成機関で「明専」の名で親しまれていた明治専門学校（現、九州工業大学）を出て、日本化薬に勤める技師であった。

廣松一家は転勤で旧満州に居住した後に、父の病気療養のため実家に戻ってくるが、実家の補修のため、母の郷里に近い現在の筑後市船小屋鉱泉に半年ほど暮らした。

廣松渉は物心つく頃から、蒲池に居住したから、実質上はそこが生まれ故郷と言っていい。

一九四四年、小学校五年生の時、皇国史観に疑問を呈して、担任教師に「非国民」と怒鳴られた。この頃までに啓蒙的科学書を読み漁り、アインシュタインの時空間像や宇宙像に興味を抱いた。

一九四五年八月十五日、敗戦。家に秘匿されていた改造社版『マルクス・エンゲルス全集』に接し、読み漁る。

廣松は一九四六年三月、蒲池小学校を卒業して、福岡県立中学伝習館（旧制）一年に入学する。

廣松の思想形成には、家庭環境が与かって大いに力があったことは間違いない。母は、日本共産党のれっきとした活動家であったし、母の兄の平木恭三郎は、日本共産党の機関誌「前衛」の副編集長だった。ちなみにこのときの編集長は宮本顕治。

わたしは一九四七年の夏休みに廣松の家へ遊びに行って、その平木恭三郎を紹介された。いかにも物静かな典型的な白皙のインテリゲンチャーだという印象を受けた。

中学校に入学してからは、三級上の宮川武寿や龍昇吉から、読書や思想の面で強いインパクトを受けている。

廣松は『哲学小品集』（岩波書店「同時代ライブラリー」）の中の「読書遍歴」の中で次のように述べている。

私が秋ごろから出入りしはじめた左翼サークルには、三級うえのMとかRとか、錚々たる読書家たちがおり、同期のSなどの加入もあり、私としてはこれら先輩や同輩たちの話題についていくためにも、せい一ぱい背伸びをして、手当り次第に本を読まざるをえなかった。小説などというものを読むひまがなかったのは勿論のこと、授業なんかにうかうか出ているひまもなかった。

（初出は「週刊読書人」七〇年八月十七日号）

イニシャルのMは宮川武寿、Rは龍昇吉、Sは白井朗である。

廣松は、ここでは宮川や龍についての心情的傾倒のことは直接触れていないが、わたしは廣松が宮川や龍について、人格的にも陶酔感にも似た強い畏敬の念を持っている様子を、直かに何度も見聞きしている。

宮川に限って言えば、当時の中学生のレベルを遙かに超えて、マルクシズムを中心とした先端的社会科学の諸文献にびっくりするほど通暁していた。それらの文献をふまえた国際情勢や日本の政治状況の分析を歯切れのいい早口でまくしたてる時の宮川の表情は確信に満ち、説得力もあった。

廣松はそんな宮川のマルクシズムをめぐる該博な知識と歯切れのよい弁舌に、すっかり惚れこんだのではなかったか。

一九四七年（昭和二二）に、中学伝習館五年生だった吉開正格たちのアイディアで、福岡県山門郡内（現在の行政区画は、柳川市とみやま市に分かれる）の男女中等学校、すなわち中学伝習館、柳河高等女学校、柳河商業学校、柳河技芸女学校（現、杉森女子高等学校）、山門高等女学校の五校による合同文芸誌『学舎鐘』が発刊された。そこへ中学二年生の廣松が「社会科学と自然科学」のタイトルで寄稿している。

社会科学と自然科学との関連を、歴史的展望の上に立って記述したもので、四百字詰九枚の堂々たる論文である。一部を引用する。

唯物論の系譜が十九世紀に入り、フォイエルバッハを経、マルクス及びエンゲルスに至って始めて人間が社会的歴史的な存在として取り扱われるようになり、宗教に対する批判も完膚なきものになり得ることとなったのである。マルクスは科学に歴史性を付与することによって、始めて真に科学の名に値する社会科学を樹立し得たのである。

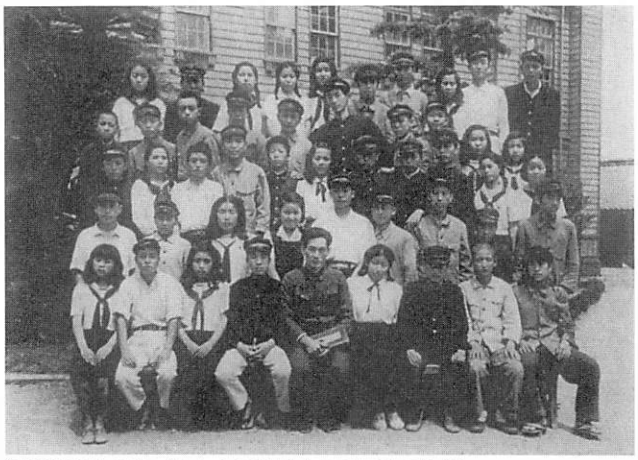
これは中学二年生の年齢層が書いた論文とは到底信じられない。不世出の超早熟の天才と呼ぶゆえんである。

男女共学の洗礼を受ける

一九四九年四月、廣松は福岡県立高等学校伝習館一年へ入学した。しかし、これは形式的なもので、併置中学校卒業生は、全員無試験でスライド入学するシステムである。

廣松たちが高校進学と同時に、伝習館と柳河女子高等学校が合併して、男女共学の福岡県立伝習館高等学校が発足する。

それまで、ずっと男女別学だったのに、多感な思春期に、いきなり男女共学の坩堝に投げ込まれたのだから、その刺激の強さは想像を絶するものがあっただろう。男の子も女の子も、その多くは一時期、平衡感覚をまったく喪失していたと思われる。残酷きわまる試練だったと言うべきであろう。



伝習館高校１年（上から２段目中央の長身の生徒）

廣松は間もなく同じクラスの美少女にほのかな慕情を抱くようになる。その少女の名はM子と言った。

M子は美貌に加えて、その声色がたいへん魅力的だった。当時評判だったNHKラジオ・ドラマ「えり子とともに」のえり子の声色にそっくりだった。

内村直也作の「えり子とともに」は、昭和二十四年十月五日から昭和二十七年四月三日まで、夜九時から三十分間放送されていた。二年半もつづいたのだから、かなりの人気番組だった。東京山の手の中流家庭の大して波瀾もない日常を、明るいタッチで描いたホーム・ドラマである。戦後のいささか暗い沈みがちな世相に、ほのぼのとした気分を吹き込んだ。

主演声優のえり子こと阿里道子の声は、いかにもナイーブであえかな感じだったが、写真で見る阿里道子は女性ホルモン過剰の熟女、どうかするとバンプの妖艶なイメージさえあった。あの声には、やはり当時のM子のスリムな、少女らしい清楚表情がよく似合った。

M子に対する廣松の慕情は、次第にはげしいものになった。しかし、さまざまな紆余曲折はあったが、結局この恋は実らなかった。

M子が廣松からもらったラブ・レターは、百通を超えていた。決して読みやすくもなく、うまいとも言えない例の文字でM子へあてた文面には、甘い愛のささやきなど、どこを探してもなく、マルクシズムに立脚した観念的なボキャブラリーが氾濫する硬い文面が最初から最後までつづいていた、という。

M子は一九五六年、現在の夫と結婚する時、それまで保管していた廣松の手紙を全部焼いた。そのことを小耳にはさんだ宮川武寿が、「もったいないことをしたものだね。今まで持っていてみろ。たいへんな値うちものだぜ」

と言った。

GHQ誹謗のびら撒きで退学処分

一九四九年（昭和二四）一月の衆議員選挙で、日本共産党は画期的な三十五の議席を獲得して、日本社会に驚愕と衝撃を与えた。日本国民以上に衝撃を受けたのはGHQで、これをきっかけに、着々と共産党弾圧の対策を練っていたのだろう。

一九五〇年（昭和二五）六月、マッカーサーは、吉田首相あての書簡で、日本共産党中央委員などの公機追放を司令した。

これに抗議するびらを校内に撒いたのは、廣松と白井朗である。

廣松や白井の行為は、絶対の権力者GHQの政策に、おおっぴらに逆らったもので、表沙汰になれば、只ではすまなかったに違いない。悪くすれば廃校にまで累が及んだかも知れない。先生たちがたいへんな危機感を抱いて事後処理にあたったのは当然だった。

結果、廣松は退学、白井は無期停学のあと復学。

廣松の母は、先生たちの前で、「うちの子は決して間違ったことをしていません。それがどうして退学になるのですか。理不尽な話ではありませんか」

と切り口上で食ってかかった。

廣松は一九五一年に発足した文部省の「大学入学資格認定試験」に合格し、東京大学文学部に入学。つづいて大学院博士課程を修了した。

東大助教授就任のエピソード

廣松はマルクス主義関係の文献をつぶさに検証した結果、日本共産党の運動綱領を受容できず、新左翼の理論的指導者となった。

一九七〇年（昭和四五）三月、三七歳のとき、学生運動を支持して、名古屋大学助教授を辞職して東京に戻った。

その頃、わたしはお茶の水駅近くのレストランで廣松と昼食を共にしながら、二時間ほど懇談したことがある。廣松はストレートには言わなかったが、筆一本で食っていくことの大変さを匂わせた。

その後、法政大学や東京大学の非常勤講師をしながら、在野の学者として、数々の注目すべき論文を発表しつづけた。

しかし、やはり大学にきちんとした基盤を持つことが研究を継続する上で、絶対のプラスになることは、本人もわかっていた。従って東京か東京近郊の国立大学に職を得たい希望は強く持っていた。

その頃、千葉大学で哲学を講じていた中村秀吉（故人）は、パルタイに忠実な人であったが、廣松の学才を高く買い、

千葉大へ招く決意をして、廣松も内諾していた。しかし、教授会でノーが多く、廣松の就任は否決された。

パルタイが組織をあげて反対票を集めたためであった。

中村は責任を感じて、親しい間柄の東大教授大森荘蔵（故人）に相談した。大森は東大駒場に招く決心をしたが、千葉大でのようにパルタイが動くことをひどく心配した。教授会の投票は賛成多数で承認され、大森もほっとしたという。一九七六年（昭和五一）、廣松四三歳の時である。

活動家より学者としての存在理由（レーゾン・デー・トル）

高校時代、廣松と一緒にGHQ誹謗のびらを撒いたり、反戦運動をやったり、その後生涯にわたって職業革命家でありつづけた白井朗は、東大の教壇に立った廣松を、よく言わなかった。わたしはセクトの違いかな、とも思ったが、党派を別にして活動家としての現役から事実上足を洗ったことに対する不快感だっただろうと思う。

廣松が東大助教授に就任する前に出した著書の序文に、

「自分は職業革命家として立っていく自信がない」

旨の告白とも宣言ともとれることを書いている。その書物の題名が何であったか、記憶がすっかり欠落している。拙宅の書棚のどこかに必ずあるはずだが、未だに捜しあぐねている。でも、フランス語の activiste をカタカナに直して、職業革命家（また活動家）の横にルビをふっていたことまでは記憶にはっきりあるから、その存在はまちがいない。

職業革命家として立っていけない、と廣松が言うなら、わたしなら、

「ああ、それがいい。きみのような類まれな知的エネルギーや精緻な思索力を持った人間は、当然それを生かすべきだよ」

と、双手をあげて賛成してしまう。

一九六六年から十年あまりつづいた中国の文化大革命は、二十世紀の焚書坑儒であるが、廣松を遮二無二実践運動に駆りたてようとするのは、文化大革命と同じ発想であろう。廣松のレーゾン・デートルは、むしろいい意味でのサロン・マルキストに徹することだったと思う。

わたしが廣松からもらった著書の中で、何とか食らいつけたのは二冊ある。一つは『今こそマルクスを読み返す』（講談社現代新書、一九九〇年）で、廣松のテクスト・クリティークの厳密さを知ることができた。そのすさまじいばかりの知的エネルギーには驚嘆のほかはない。

もう一冊は『〈近代の超克〉論』（講談社学術文庫、一九八九年）である。これは『存在と意味』に代表されるような哲学の原理的なものか、マルクシズムに関するものがほとんどを占める廣松の著書の中で、珍しく昭和思想史を具体的に剔抉している。廣松は講演などで、参考文献としてあげるのは、ドイツ、フランス、イギリスの原書がほとんどであったが、いかに廣松が日本の近代思想や文学にも強い関心を持ち、しかも厖大な文献を渉猟して、完全に自家薬籠中のものにしているかがよくわかる。

葬　送

一九九四年（平成六）五月二十二日午前九時四八分、入院中の国家公務員共済組合虎ノ門病院で、伝習館が生んだ稀代の「知の巨人」は永遠の眠りについた。享年六〇歳。

五月二十五日午前十一時半から、港区高輪の高野山東京別院で、葬儀・告別式が行われた。式場はお寺であったが、無宗教である。

昭和二十三年三月卒業アルバム（社会科学研究会）
二列右端　廣松
一列中央　白井
その後ろ　緒方勇雄先生
後列右端　龍　昇吉
一人おいて　松本一郎
その前　野田制

参列者は、宮川武寿、廣松と高校三回生の同期女性四人も来た。その年度の在京伝習館五期会幹事長の江崎和夫（旧中五十五回生）の顔もあった。

掲示された献花目録に「伝習館高等学校在京同期生女性一同」とあった。ほかに京都の梅原猛、山崎正和、廣松がこの三月まで勤めていた東大教養学部長蓮實重彦のもあった。わたしの近所に住む哲学者中村雄二郎の姿も見かけた。

十年ぐらい前、北海道を旅行した時、小樽駅前に小林多喜二を顕彰する大きな看板を見たが、現在のところ、柳川には廣松を顕彰するモニュメントは何もない。

ただ、伝習館同窓会名簿には何回か前から高校三回生として廣松の名が載るようになった。亡くなってからは物故者として記載されている。

正式の卒業生ではないのに、廣松渉の名が記載されるのは、同窓会の度量の大きさと、廣松顕彰のささやかな姿勢を読みとることができるであろう。

（参考文献）
○小林敏明編『哲学者廣松渉の告白的回想録』（河出書房新社）
○成清良孝著『廣松渉における人間の研究』（一竹書房）

（編者注）
『廣松渉における人間の研究』（一竹書房）は、二十二年十一月、NPO法人日本アカデミー協会の「第10回日本文芸アカデミー大賞」を受賞されました。

わが青春の日々

よかやっかんも

高１　横山二三男

その人ピッタリの命名があり味がある。

わが子の名前になると頭をひねる。一度つけたら一生ついて離れないから……

寿限無寿限無の長助は百三十字あるが長すぎても、へへ困りやす。

ここで登場する方はみな先生、既述のお方は除いても、伝習館の先輩たちは命名の超天才だね。面白くて止められない。

後輩たちよ！　悪口じゃないぞ。私と同世代の人たちならすぐ本名が浮かび、想い出の青春時代を後世の人たちに素直に語られる。

そして激動の世の中にもこんな楽しい話があり、若き生命を國に捧げた友人たちも笑ってくれると思う。

辻町の昭和堂書店横の清流にはメダカはもとより、ベンジョゴが泳ぎ、ゲンゴローたちが台湾藻の上にのんびり休んでいた。

対岸に私たち一年一組の北校舎がある。

一階廊下の板敷きをスリッパの摩擦音だけ聞いて、窓際に座るサトルは、どの先生なのかピタリと当てた。的中率１００パーセント。

「トンボが来たぞ！　ボヨョ～ン」

机の下のギターの弦を鳴らす。

その合図で教室内が一瞬静まる。

まもなく小柄で黒髪を七・三分に分けた国語教師がおもむろに壇上にたたずむ。

着くなり教本を拡げる。

〝われやらはえて、出雲の国の簸川（ヒノカワ）におはしましき……〟

ソフトな口調で古典を朗読する。こだわりのリズムで。坦々と。

いまの島根県東部に流れる斐伊川だろう。

〝私は年老いてヒノカワの上流に住むことにした〟――かみしめるような解釈がつく。

黒板はめったに使わない口述だ。

なんたって日本神話に出てくる素戔嗚（スサノオノミコト）命が八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治したところのくだりである。

トンボは優しい。

温情というか決して生徒へ手を出さなかった。黒板も使わない名調子に悪ガキたちも静かに聞き入っていた。

ヘビースモーカーで私たちのテニス部の部長さん。中モズでの全國大会ではバックネット裏から「横山ガンバレッ！」と応援してくださった姿がいまでも忘れられない。

ジュウタンは剛の者。

授業に無関心な野郎たちを発見するのが得意業。

ｚ・ｚ・ｚ……

ヒソヒソ話でもしていたら、「そこの敏男！　出て来ーい！」と大喝一声教壇前へおびき出す。

敏男は恐る恐るジュータンに近ずく。頭を下げる。重箱のように四角い顔が鬼瓦みたいに見える。〝攻撃〟が始まる恐怖感で。

ガッン、ゴッゴッ……

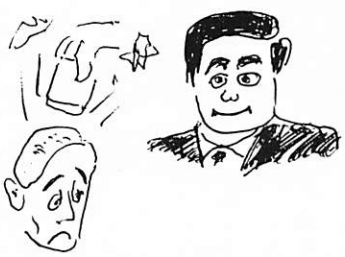
チョーク箱の蓋をたてて握りドンピシャリ脳天めがけてたたくので仕末が悪い。

イテテ、イテテ……と悲鳴あげずに痛味に耐えた人材がいまでも生きているはずだ。

その風景は下手な落語より愉快だった。

「習という字はな、小鳥が巣立ちする時口から泡をふいているサマだ。なにおマネぶかというと教えを学ぶわけだ。イイカ！」

象形文字の専門家。でかい声で喋るから最後尾の席まで届く。マイクはいらない。



さらにジュータンの専門は乾布摩擦。

寒風吹きすさぶなか全校生徒を半裸にして素足（ハダシ）、朝令台に乗って、イチ・ニ・サン・シ……と健康修練をやっていた。

漢文の教師が体育の一環をになっていたのにはびっくり。ジュータンらしい。

シガネは本格派の体操教師。

昭代村からチャリンコでのったり橋を渡って〝通学〟して来た。胴長短足の典型的な日本人。色黒の顔にゴツい体をしている。

私には易者然と映った。博学だから。

「痔にはな、キレジ、イボジ……がある」

まったく職業（センモンゲイ）とちがった話で、黒板にシンノスの絵をかく。外が雨、そして雨天体操場が柔剣道で使えない時は一時間ずっと痔の話である。日本人にはなぜ患者が多いか知っとるか？　イボジがあるからキレジになる。

痛い。手術すると、手術台から下のバケツへたらりたらり鮮血が落ちる。実際は少量の血だが水へ垂らすと広く散らば

り、眺めた人は気絶する時もある。臭いバンソウコウと包帯が取れるまでの二日間は死ぬほどつらい。……〈MORE〉……

自分の持病だから話やすい。

黙っときゃキリがない。

そこでサトルの出番だ。

ボョヨ〜ン、コンコン……

シモの話はほかの場所でやってほしいという生徒たちのうるさい声を代弁してくれと本論に入る。痔はジガネにとっての〝まくら〟なんだ。激痛のあまり両腕を二人の生徒にかかえられ職員室へと避難したこともある。

雨降れば痔かたまる。

・・・・ツンさんは物云うと右手の平を耳に当てる。放送禁止用語のない時代だから、生徒たちはツンさんはこっちの言うことが聞えないから、どんなにわめいても、ガタガタしても平気だと定評があり、授業は自由奔放に進む。

生物の教師でありながら、「安心しろ、俺のバカでかい声は意外と反響があるぞ」なんて己の世界からの世間話が面白かった。

退職した時「オレはティーチャーからティー（お茶）・チャー（茶）になる」といって、本当に細工町で八女茶の店主におさまったのには驚いた。

まだまだ伝習館には個性豊かで、幅の広い先生方がいた。

わたしたちはすばらしい環境で育ったもんだ。

もっと書きたいが今月はこんなところで。

最後にわれわれが一斉に合唱した挽歌を捧げよう！

（数え歌である）

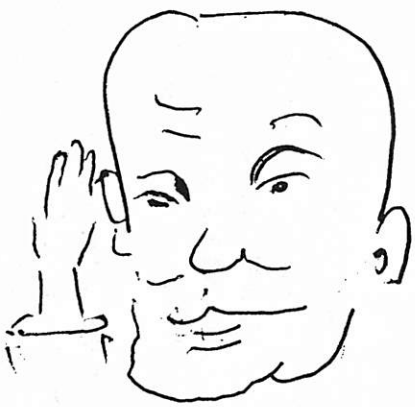
ひとつとせ　人も良く知る伝中（習）の、

ジクドル教員の数え歌

そいつあゴーキだね

そいつあゴーキだね

（あとは先人に聞け）



遠き日のおもいで

高４　高士権兵衛

昔見し　望みの夢は　夢なりき　ただ夢なりき　目覚めつつ

風の如く来て、去っていった一人の女性がいた。

大学に入学してかなりの月日が経つというのに、東京という怪物に気おされて、ぼくは一種の恐怖心のようなものを抱いていた。東京人の話題の豊富さと言葉の流暢さ、洒落た口調に圧倒され、すっかり無口になってしまっていた。東京の街に馴れ、人に馴れ、自分も東京に住むひとりの存在だと思えるようになるにはいくらかの時間を要した。その契機となったのは、ふたりのクラスの親友の存在であり、もうひとつは、哲学論争の相手を見いだした事である。しかし、何よりも、東京の街を堂々と闊歩できるようになったのは、K子のおかげである。これから書くプラトンのような愛というべきか……遠き日のわが青春のヒトコマを書き留める事にした。

入学はしたものの、学部の教授陣に絶望し、他学部の講義ばかり聴きに行った。そこでも、何人かの男女学生と、なにがしかの交流はあったが、それも、たまにお茶を飲み雑談する程度であった。一年が過ぎた頃から、何ヶ月も図書館に入り浸りもしたが、満たされぬ想いのまま、ある秋の日、YWCAの英会話学校に通う事を思いついた。高田馬場から程遠くない戸塚の路地裏の奥まったところにひっそり古い建物があり、それがYWCAであった。当然ながら女性が多かったが男性もかなりいた記憶がある。

中途入学ということもあって、はじめは、アメリカ人教師の授業のルールがよく理解できずにいた。何人かの女性が手助けをしてくれた。K子と出合ったのはこの教室である。

いつの頃からふたりの会話が始まったか、いまは記憶にない。次第に親しくなり、そのうちに、帰りに喫茶店で、長く話し込む日も多くなった。頭でっかちで自己主張の強い同じ大学の女子学生達と比べ、女性としての包容力があり、優雅で魅力的に見えた。彼女は絵が好きであった。こどものころからピアノを習っていたせいか、音楽にも造詣が深かった。

美術は、ぼくも、文学部のS教授の講義に傾倒していて、博物館にあった先生の研究室にまでよく押しかけた。先生もあきれた挙句に画集はいつでも見にきていいよ、と他学部の学生にして異例のお許しを得たぐらい熱中した。以前、図書館に篭って、泰西名画の画集や解説書を読み漁り、当時にしてはかなりの知識レ

ベルであったと思う。

初めのころ、話題は美術のことが多かった。K子はバルビゾン派のクールベ、コロー、ルソーなどがお気に入りで「私、画集を開くときいつもこれを最初に見るの……」といっていた。印象派の画家も好きなところは、ぼくと良く似ていた。しかしあるとき、「最近、ルネッサンス前（本当は早期ルネッサンスと言うべきか）のチマブエ、ジョット……からフラ・アンジェリコまでのいろいろの宗教画に心惹かれるようになったの、印刷だと迫力ないから、いつか、一度イタリアに行って見てみたいわ……」というようなことを口にしていた。なにか神への接近を模索するような状況にあったのだろうか。ただ、美的感覚に優れた女性であった。その一時代前のマルガリトーネと言う画家が歴史から消え去ろうとしているのを嘆くS先生の言葉と二重写しになって記憶が甦ってくる。

いつだったか、一緒に、藤原歌劇団によるベルディの椿姫（ラ・トラビアータ）を見に行った事がある。アルフレッドは藤原義江だが、たしか砂原美智子がビオレッタを演じたと思う。多感な彼女は、最後のヒロインの死に涙していた。その後、暫らくして、何処へいくときだったか、東横線の日吉の近くで藤原義江を見かけて、彼女とびっくりして顔をみあわせた事があった。音楽といえば、一緒によくレコード喫茶のランブルに行った。フレンチトーストに始めてお目にかかったのはこの店であった。

ある日彼女が自宅に招待してくれた。自宅に行くのはあまり気が進まなかったが、出かけることにした。目白通りを大日方の方向にいったところで、庭にある一本の大きな木が周囲を睥睨していた。田舎者で東京の家庭になじみのないことから、洋式の応接間でただただ小さくなっていた。お母さんがいろいろ気を使ってくれるのだが、その分ますます恐縮するばかりであった。父上がW大の出身である事、自分とお姉さんがN女子大在学中であることは聞いていたが、話しているうち、妹もいたことが判った。お母さんも本科になる前の同じ女子大出身であった。しばらくして、二人きりになり、やっと心が落ち着き、出前のすしをご馳走になった。

K子はピアノを弾いてくれたが何の曲だったかいま思い出せない。演奏の腕前といえばさほどではなかったように思う。少なくとも、その音楽知識の該博さにくらべれば、実技は伴っていないというところであった。

彼女は、少し前に出版されたロラン・マニュエルの「音楽のたのしみ」（吉田秀和訳）全3巻に感銘を受け愛読していた。僕も借りて読んだ。これは、著者と確かタグリーヌと言う才気あふれる女性との対話の形をとっていたが、エスプリに富んだ素晴らしい本だった。

以前、池辺晋一郎と檀ふみのNHKの音楽番組があったが、この本を意識していたのではないかと思っている。

その後、何日かして、新宿御苑を散歩した。まだ現在のように整備されていないだだっ広い野原のような場所である。変哲もない庭をぐるぐる回ったり、座ってただ話をするだけであった。いつも気が合って、何か互いに、分身のような存在になっていた。今、思い出してみてもいつも一緒にいたような気がする。一緒にいるだけでしあわせな気分であった。そのころのなんとも名状しがたい淡い感情がいまも蘇ってくる。上野の美術館、博物館にも何度か行った。

ある夏の終わり、YWCAの仲間で揃って遠出をしようと一決、行き先は奥多摩巡り、日原の鍾乳洞ということになった。山歩きの間、二人は度々、遅れ勝ちになり、同行の教師タッカー先生にまで冗談をあびせられた。

写真が一枚残っているが、通常は学生服かセーターで通学しているのに、このときは、どうしたことか、ジャケットをちゃんと着込んでいるではないか。隣におたがい済ましこんで写っている姿を、いま追憶に曇るまなこで眺めている。

その後、K子が下落合の下宿に遊びに来た事があった。獅子吼会と言うへんちくりんな宗教団体の隣の、蔭になって、建てられていた古い家である。玄関を上がってすぐ左の4畳半くらいの洋間で寝起きしていた。本だけは沢山買い込んでいた。互いに、よく行き来していた級友のIやNなども感心していたものである。案の定彼女も「わあ、ご本が沢山あるのねえ……」と第一声である。

座布団もない部屋で、二人座り込んで話しをした。ここで女性と二人きりというのは始めての経験である。沈黙のなかに、何かの期待が芽生えた。しかしそういう折に、いつもキャッチボールで遊んであげた下宿の坊やがドアを開けて入ってきた。まさに、ドラマのなかの闖入者である。二階に部屋を借りていた夜の仕事の女性がいた。その人の子供も坊やと同じ年頃であったので、一緒によくあそびを教えていたが、その子はけっして部屋には入ってこなかった。

このあと、ふたりは、近くの哲学堂公園まで歩いた。恋人達らしいカップルが幾組かいたが、われわれは超然として散歩を続けた。そうしてキスさえ一度もしたことがなかった。ときめく心がいつもありながら、この二年の間、とうとう、兄妹のように、時をすごしてしまった。

そして、ある頃から、K子は、教室にこなくなった。友人らしきひとはいたが、消息を尋ねたりはしなかった。そして、YWCAの英語教室から姿を消す事にした。それっきり一度も会っていない。

はじめての　君をみし　はじめての
その日をば　そのたまゆらを　しのばなむ

秋なりし　夏なりし　なごりさへ　とどめずに　おのづから　かききえぬ
しらざりき　わが心　おろかにも……
さらば　すべてはかなし

柳川の絵の写真

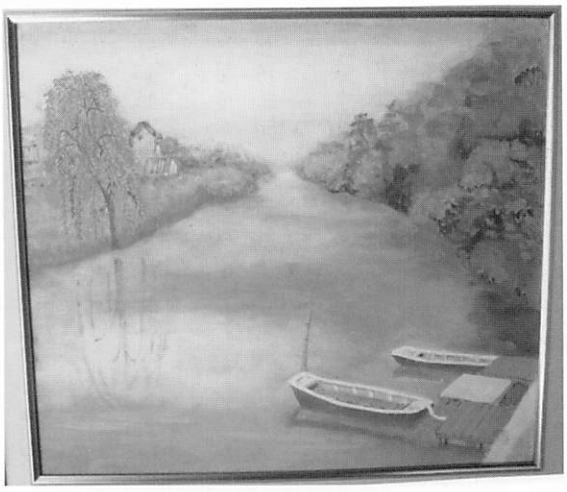
高5　岸　洋子

私は父親が病弱で油絵を描いている姿をみて育ち、今日まで絵を続けています。油絵から日本画に変わって20年になります。

今年5月に蒲池小学校の同期会に出席のため一人で帰省し、前日に、福岡の山の上ホテルに兄妹全員（5名）が集まって久しぶりに亡き父母の話で楽しみました。

翌日兄に車で日吉神社へ連れて行ってもらい観光客の通る船着場でスケッチしてきました。

柳川なので柳の木を1本いれたいと思いましたが武蔵野には柳が少なく銀座へ足を運んで描きました。



昨年9月法事で帰省した折、柳河駅でタクシーの運転手さんに「絵になる所へ連れて行ってほしい。」とお願いしたところ水門の所で、くみずを描きました。

第60回伝習館同窓会総会に出席して

高8　樋口　誠佑

10月7日から11日まで4泊5日で柳川に帰省して、9日に柳川市民会館で開催された第60回伝習館同窓会総会に出席して参りました。

7日福岡空港に着いて先ず足を運んだのは、伝習館高校を卒業後三菱銀行に勤務していた当時、よく行った福岡市中央区天神の中華料理店【平和楼】です。懐かしい〝チャンポン〟を味わうと、福岡に帰って来たことを実感する、私の帰省コースの定番です。

その後、西鉄久留米駅前からレンタカーを借りて、八女市にある父方の菩提寺（光善寺という幽霊の屏風がある有名なお寺です。）に向かいました。ナビの案内は、新しく出来た道だったらしく、見知らぬ場所を通って到着はしましたが、味気ない感じがしました。ナビ任せの運転では、人間の思考力は失われてしまうのではないかと思いました。

柳川駅に向かう段になり、やっとナビが見慣れた道を案内して呉れて、懐かしい風景に接しながら「かんぽの宿　柳川」に到着しました。

翌8日は、E君が企画して呉れた同級生のゴルフコンペが有明C.C.であり、4組15名（関東から5名）が参加して、大変賑やかでした。

「俺はゴルフを極めた。」と言うI君は、今年は未だ2回しかクラブを握っていないそうですが、公言通り準優勝はサスガ。伝習館高校の野球部監督も務めた、ピーク時はハンディ7まで行ったと言うS君は、「腰痛が酷くなって。」と痛々しい足取りにも拘らず、飛ばすこと！　スコアーは90で唖然とするばかり！（ソンじゃヘルニアは治る訳ナカ！　↓下手のヤッカミ）

約半数が80～90台のハイレベルで、このごろの爺さんパワーはスゴカ！

片や、総武C.C.北コースを30台で回ったと豪語していたEN君が、ブービーと同スコアーなので、「ドゲンしたと？」と冷やかしたら、「こんなコースはゴルフ場じゃナカ！」とソッポ向いた時には、このコースのエチケット委員長をしているT君に聞えたら不味いと、思わず顔を見てしまいました（安心）。「メーカーとブービーは自分に任せろ。」と請け負ったY君、三味線かと思っていたら本当にブービーで、意外に正直なのを見直した次第。

と言う小生は、この日に備えて3ヶ月間取り組んだスウィング改造の甲斐も無く、百獣の王は揺るがず、己の実力を自覚した次第です。（ヤッパシ三池炭鉱の近くやケン、石炭の代わりに砂バ何回も掘らされてクサ、場所が悪かバイ。……

T君ゴメンナサイ。）

クラブハウスでの軽食後、柳川に戻って一杯やろうということになり、7名で柳川小学校以来の同級生が営っている【ランヴィエール勝島】に、「ワケノシンノス」（皆さんご存知カンモ、有明海の珍味バイ！）を食べタカーと注文をして押しかけましたら、急いで魚屋から取り寄せて出して呉れました。

皆が「あの会費じゃ悪カバイ。」と恐縮するほどの歓待を受け、スッカリ上機嫌になって歓談且つ痛飲をしました。

9日は同窓会当日、市内のいたるところに開催の立看板が立てられて、おにぎえの祭りと相俟って、同窓会の雰囲気を盛り上げていました。

久しぶりに柳川に帰ると、昔は当たり前で余り気にもしなかった山車の「どろつくどん」が懐かしく、町中を練り歩く山車を追いかけ、途中行き交う川下りの舟をカメラに収めました。

昔は山車も6台あったそうですが、今では3台（保加町、西町、京町）と踊り山車だけになって、淋しくなったと氏子の方達が話していられました。

途中、出発前に予約していた旭町の「大松下のあめ」を受け取り、粕漬と越山餅を一緒に自宅に発送して、帰省前から楽しみにしていた地元家庭料理にありつくべく、再び【ランヴィエール勝島】を尋ねました。2日前からご主人が心を込めて準備して下さった料理は本当に美味しく、これで柳川に来た甲斐があったと、大いに満足いたしました。これは私の帰省コースで楽しみな定番です。（特別料理で営業用メニューには有りませんので、為念！）

満ち足りたお腹を抱えて、同窓会会場の柳川市民会館に向かいました。市役所の西隣に有る大きな立派な会場で、半纏を着た実行委員会の面々が会場内までずらりと並んで、テキパキと整理に当り、大変スムーズな流れでした。

聞くところに依りますと、担当の第32回卒は約100名を動員して、今回の運営に当たられたそうで、統率の取れた運営を拝見しその努力と誠意に感服いたしました。

総会は、定時に始まりましたが人も疎らで、1，000人は入るという広い会場が尚更広く感じられましたが、総会が進むにつれて入場者も増え、終了する頃にはほぼ満席に近い状態でした。

私が在校の頃よく言われた「柳川時間」は、今でも健在だと思わずニヤリとしました‼

総会は、目次通りに議長団が選出された後、前年度「事業報告」、「決算報告」、次いで監事から監査報告が行われ審議の後、夫々承認されました。

引き続き新年度予算書（案）、新役員の承認の件についても、本部原案の通り承認されて総会は終了しました。この間約25分、整然と審議の上、承認されたことを特に付記します。

そして、来場者お待ち兼ねの桂　文珍師匠の記念講演となりました。（この項割愛）

5時から開催される「御花」での懇親会は、我ら8回卒の先遣隊がテーブルの確保に赴き、4時30分には、「何しトットヤ！俺たちはもう出来上がットットゾ！早よコンカイ！」と催促の電話を受ける有様で、さながら同級会の趣でした。

35名の同級生で大いに盛り上がりましたが、お開きになる前に同期の大半は、西鉄柳川駅前にある同級生経営の〝しげちゃん〟に席を移し、カラオケと歓談が続きました。名残を惜しみながら又の再会を約して、解散したのは10時頃でした。

「御花」での懇親会は、津軽三味線の演奏や、フィナーレに花火の打ち上げが行われ、盛会裏に終了したそうです。

10日早朝、かんぽの宿まで同級生のS子さんが、ご自身が表装されたCD2枚を記念に届けてくれました。友人ならばこそのプレゼントを有難く頂戴しましたが、気鋭のピアニストの演奏で、心の癒される素敵なアルバムでした。

午前中に妙経寺（蟹町）にある母方（水上家）代々の墓の閉眼式（墓を壊して整地し、お寺にお返しすること。）を行い、遺骨は祠堂で永代供養をお願いして、墓守を終えることになりましたが、これで柳川との縁が又一つ薄くなったようで、淋しく思いました。

その後、旭町の【本吉屋】で、昼食に〝うなぎせいろむし〟を味わいました。（これも欠かせない帰省コース定番の1つです。）

これで柳川の用件は全て終了し、西鉄柳川駅に向かう途中「どろつくどん」の山車と国道橋で出会い、ボストンバックを道に置いて写真を撮っていましたら、交通整理のお巡りさんから、「貴方の鞄ですか、盗まれますよ。」と注意を受け、私もつい旅行の気安さから、「柳川ニャ、ソゲン悪カ人は居らんケン、大丈夫タイ！」と言いましたら、空かさず「そうでもナカ。」と、返されたのには参りました。

博多東中州のホテルに着いて、夕暮れの近所を散策しましたが、東中洲の中心街は灯が消えて、まるでゴーストタウンのように薄暗く、そぞろ歩きも憚れる様な雰囲気でした。シャッターが下りている所も多く、人気が無くて昔の華やかな面影は有りませんでした。

近くの土居町や川端町の近くに、移転をした商店が多いそうです。

懐かしい思い出の店が見当たらず残念

第8回卒の仲間（第60回伝習館同窓会　於御花　平成22年10月9日

でしたが、代わりに増えたのがラーメンの屋台です。

川端に軒を連ねるように屋台が並び、街角の到る所に赤い提燈が見えて、今や博多はラーメンの町と化していました。

11日朝早く朝食を済ませて、三菱銀行の独身寮時代にお世話になった、寮の管理人だった小母さん（92歳、未亡人）を養老院に訪ねるべく、地下鉄で大濠公園に向かいました。

3年振りでしたがお元気で、四方山話が弾みました。デイケアの会場がある2階まで手を引いてお連れして、「又もう一度会おうね！　元気で居てね。」とお暇の握手をしましたら、小母さんがチョッと涙ぐまれたので、私も思わずシュンとなりました。

バスで天神町に戻り、帰省コース定番の仕上げは、天神地下街の【因幡うどん】で、〝ケツネ（キツネとは言わない。）うどん〟460円バ1杯！　イリコの出汁に薄口醤油の味（多分ニビシ醤油やろ）を、時間を掛けてユックリと一滴も残さずに味わいました。

私は、終戦後朝鮮から引揚げて来ました。

内地に落着く先が無かったため、母方のお墓である妙経寺（前述）の社務所にお世話になったのが、柳川との縁の始まりです。

したがって、血縁・地縁も知り合いも無く、釜山第6国民学校に入学して柳河小学校を卒業するまでに、小学校を5回転校しました。そのために幼馴染と呼べる友達は有りません。周りの誰もが戦後のドサクサを、夫々必死に生き抜いた辛い・淋しい時代でした。

その意味では、柳川を故郷というには多少憚られますが、私にとって故郷は紛れも無く柳川です。そして社会に出て今日までやって来られたのも、伝習館高校を卒業出来たお陰だと思っております。

そうした訳で、学生生活で得た数少ない友人と、伝統ある伝習館高校で学べたことは、私の大きな誇りであり財産です。

今回の帰省も、家内への名目上の用件は、お寺の整理やその他親類を訪ねることでしたが、本当の目的は同窓会総会への出席や友人との再会でした。

色々な用件を兼ねたため、時間的な余裕はありませんでしたが、明日への希望と活力を蓄えることが出来た、楽しい旅でした。

同窓会をお世話頂いた第32回幹事の皆さんと、何時も暖かく迎えてくれる我が第8回卒同級生に感謝しつつ、伝習館高校の益々の発展を祈ります。

以上

【柳川笑話②】

高7　田中敬之助

◇時間にルーズ

柳川のお寺で、ご住職のお話。

「柳川では、まだ時間に対する考えが甘かばんも……。例えば、何か問題が起るでしょうが、そんなら、今晩寄合いばしまっしょ。何時からにしますか？

うーん、晩飯喰ってからで良かろう……。

これで、みんな納得して帰るとですよ。

ところが、晩飯は早い人は5時頃食べるし、遅い人は8時頃食べる人も居られる。これじゃー待つほうは、大変ですよ。柳川は、この辺から直さにゃいかんとですよ」

◇なーんね　柳川ね

私は、ブリヂストンに入社して、初めての勤務は久留米工場だった。配属されて、一ヶ月ほどして、柳川出身であることが、課員のみんなに知れ渡った。その時、ある女性が言った言葉がまだ耳に残っている。「なーんね、あんた柳川ね。」軽蔑の眼差しである。

そりゃー久留米に較べれば、柳川は小さな町ですよ。でも、そこまで云わなくてもよかろうもん。もっとも、あんたは垢抜けしとるけん東京の人とばっかり思っていた、と云うのなら許せるけど。

◇ポッポしゃん菓子

数年後、私は横浜工場に転勤となった。転勤後、はじめて実家に帰る時、おみやげに、鳩サブレーを買って帰った。

ところが、お袋はあまり喜んでいない。「こげな、子供騙しのようなものを買ってきて」と云うのである。「ぞぉ、ぞぉたんのごつ、こりゃ、鎌倉・豊島屋の鳩サブレーち云うて、関東地方では有名なお菓子ばい。」

後で分かったが、その昔、柳川地方にはポッポしゃん菓子というのがあって、それに鳩サブレーがよく似ていた。しかし、それは余り美味しいものではなかった。そのイメージがお袋にはあったようだ。

◇ホテイアオイ

近所の花屋さんで、ホテイアオイ1個160円と書いてあった。確か東京では、200円というのを見た覚えがある。

こんなものでもお金になるのか。柳川ではどうだろう。以下、私が考えた勝手な会話である。

『えぇっ、こりかんも、こりゃ、朝鮮藻ち、云うばんも。こりば、欲しかつですか、どうぞ、どうぞ、持って行き召せ。

えぇっ、〝お金？〟そげなつは要らん、こげなつでお金貰ろうとったら罰ん当たるばんも。裏の堀に、どがしこでんあるけん、好きなだけ持って行って良か、ぜーんぶ、持って行ってくれ召したら、たぶん、市長さんから感謝状が贈られるち思うばんも。』

まあ、こんなことになるだろう。

◇変わり映え？

最近私はよく散歩に出かける。1ケ月も通っていない道を通ると、「ありゃ、此処に店ができてる。わぁー建売住宅が3軒も建っている。」と町の変化に驚かされる。その点柳川は、いつ行っても余り〝変わり映え〟がしない。

このことを柳川在住の友人に言ったところ、「いやぁー、柳川も大きな変化があるばい。」「えぇ?!」

「行きつけの店に行ったら、シャッターが降りていた、とか、家が壊されて更地になっとった、なんかよくあるばい。」

そう云うのも、〝変わり映え〟と云うのかなぁー。

◇有明海の魚介類

同期の友人がこんなことを云った。

「沖ノ端のお寺の娘さんふたり（筑場さんと、金見さん）が東京芸大の声楽科を出ていらっしゃる。これは、白秋祭などで、有名な歌手さんたちが、学校に来て歌っていらっしゃったので、その影響が大きいと思う。」

そこで私は茶々を入れた。「そう云うこともあろうが、私は声のいいのは有明海の魚介類を沢山食べていることに起因すると思う。その証拠に、徳永英明（沖ノ端出身）、松田聖子（お父さんのお墓は柳川の良清寺にあり、そこの住職は彼女の従兄弟に当たる）北山たけしも柳川出身、大川栄作もお隣の大川出身。みんな歌手の中でも、声がいいち云われとろうが……。」「そんなら、佐賀、長崎にももっと歌手がいても、よかろうもん。」

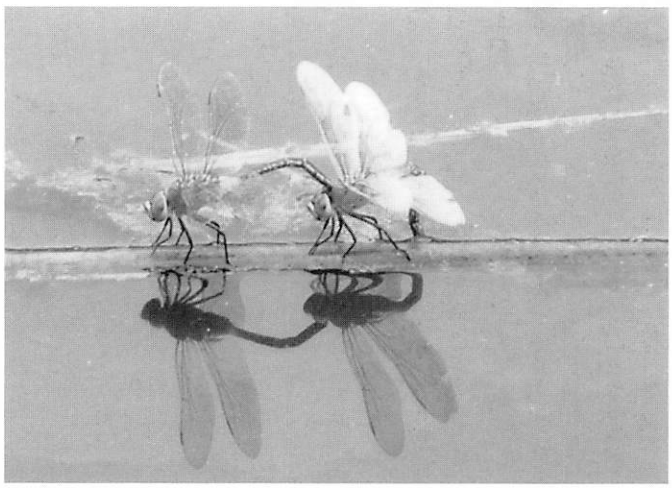
「まぁ、まぁ、そう向きにならんでも良か魚介のせいにしてたほうが、有明海にロマンがあって良かろうが……。」

ガキの頃の思い出

高11　龍　　勝

～ダンマ（銀ヤンマ）釣り～

猛暑にうだっていた8月末のある日の早朝、日課となってる朝の散歩に出かけました。二級河川の小さな支流のサイクリングロード兼用の散歩道を歩いていて何気なく川面を見るとトンボらしきものが飛んでいました。目を凝らすと銀ヤンマのタンデム飛翔でした。流石に未熟な腕前のためその様子を撮ることはできませんでしたが予想通り水面の流木に留まって産卵を始めたので望遠レンズをセットして撮影することができました。震えるような感動で撮影する一方で頭の中は昭和30年代初頭のガキの頃の時代へ飛んでいました。



稲作に大々的な農薬が使われ出すようになった昭和30年代初頭までの旧昭代村ではひらひらと弱弱しく飛ぶチョウトンボやコシアキトンボを始めとしたトンボ類がそれこそ空を覆うほど沢山飛んでいたものでした。因みにチョウトンボはカラカラヘンブ、コシアキトンボはチンダイサンと呼んでいたように記憶しております。そんな自然環境の中でのガキ達の代表的な夏の遊びの一つがダンマ（当時銀ヤンマのことをそう呼んでいました）釣りでした。

若い後輩諸君はご存知ないと思いますので昔を振り返ってみます。銀ヤンマはオスもメスも日中は基本的には飛び回っていて決して捕まえられるものではありません。ではどうやって捕まえるかと言うとメスが水草等の浮遊物に掴まって産卵してる時を捕虫網やとりもち代わりの蜘蛛の糸等を使って捕らえたものでした。メスを捕獲できればしめたものでそのメスの胴体を長さ1m位の木綿糸の先で結わえ一方の先をこれまた1m位の竹に繋ぎ、飛び回ってるオスに見えるように緩く円を描くように廻していると交尾相手が見つかったとばかりにメスにまとわりついてくるのでいとも簡単に捕まえることができていました。

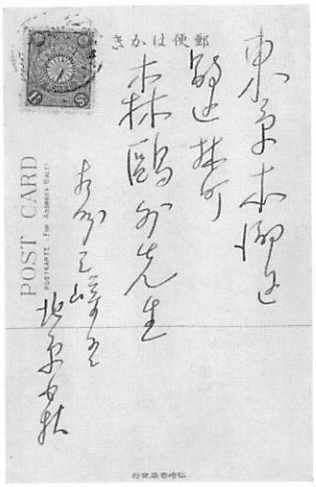
以上遠い昔の本当の意味でまだ自然がいっぱいだったころの思い出です。ところで写真の銀ヤンマの前と後ろのどちらがオス（メス）か分かりますか？

白秋自筆の絵はがき

高12　小野アケミ

文京区千駄木の森鷗外記念館に（明治の詩人たちのコーナーに）北原白秋大先輩の実筆があります。絵ハガキの宛先に東京本郷区駒込林街の住所は小石川区と本郷区が新しく二十三区になり現在の文京区です。絵ハガキのコピーが手元にあ

りますので編集局に送付致します。森鷗外記念館は現在改装中で平成二十四年十一月完成予定です。



北原白秋　明治一八（一八八五）～昭和一七（一九四二）

詩人、歌人。白秋は「明星」で活躍し、鷗外の観潮楼歌会に出席した。明治四十一年鉄幹の新詩社を脱会し、パンの会を結成。パンの会は欧化風で江戸趣味、芸術至上主義で一種デカダンの匂いもあった。この仲間が「スバル」へと向かった。この葉書は鷗外と白秋の関係を如実に示し、白秋の一種のカダンでデリケートなたゆたいを窺う貴重な資料である。

大正二年一月

東京本郷区
駒込林町
森鷗外先生
相州三崎にて
北原白秋

かげながら
新年の祝詞
申上候
先頃ハ
身のほどを
かへりみぬ
失礼なお願
申上
何卒御聞
被過度
小生また
かゝる処を
うろつき
まはり居候
申々

『青春のパイプライン』
《授業篇その2》

高18回　福山博彰

前回は漢文の授業で先生をやり込めた生徒の話を書きましたが、今回は従来とは違う先進的・革新的方式で授業を進めた日本史担当の半田先生のお話です。

もう44年も前のことですが、あのインパクトは強烈で今でも鮮明に覚えています。

《第1章》

昭和41年4月、我々が高校3年の春に日本史の教師として二十七、八才の若い先生が伝習館高校に赴任してきました。背が高くヤセ型で髪の毛が立って眼鏡をかけた学者風のいかにもインテリという感じの人、これが半田隆夫先生でした。九大大学院で日本史を専攻し、その風貌や声の響き、物静かな話し方は女生徒に人気があり（ということは実は最近知ったのですが）、授業そのものも生徒間で大変評判となり、彼の授業には他のクラスの生徒がもぐり込むほどでした。実際に私の友人も聞きに行ったことが何度かあるそうですが、一クラス55人の時代でしたから、一体どこに座っていたのでしょうね。

彼の日本史の最初の授業は、いきなり社会の上部構造と下部構造の話から始まりました。社会における政治・文化・宗教などの社会活動は「上部構造」として捉えられ、それは「下部構造」としての経済に規定される、という初めて聞く理論は新鮮、と言うよりもクラス全体が、ん？　なんじゃそれ？　という反応でした。解説を聞いている内に段々興味津々となり、ナニ？　要するに、この世の中、金がないと何も始まらない？　お金で全てが決まるって言うこと？　それが資本主義の本質?!　……へえ～、そういうことを意味しているのか……ふ～ん、でも何だか面白そうな思考表現だな。やっぱ大学は経済学部にしょッか、とその時思いましたから、人間なんて〝ひょっと〟〝ちょっと〟〝ふっと〟したことで道が決まるものです。

さて、大学に入ってから教養科目として「経済学」の講義がありました。

「……歴史の発展過程で、社会の上部構造は経済という下部構造に規定される。」

あれ？　これ何かどこかで聞いたことのあるフレーズ……。

「……そして経済の生産関係は封建制度の領主と農奴の関係から、資本主義の資本家と労働者の関係に移行し、産業革命後には労働力の商品化の現象が起こり……更にその関係に矛盾が生じ、階級闘争を生み出し社会主義革命が起こる……究極は共産主義に移行する……。これがマルクスの唱える史的唯物論であります。」

えっ、何それ?!　マルクスの史的唯物論?!　そうか、なんだ、分かったよ。半田先生が授業で喋っていたのはこのことか。大学の教養学部の講義をしていただけなのっしゃ～。俺達が知らないと思って、ズルイわい。でも高校でやるとはレベルの高さア～！

因みに私はたまたまケインズの近代経済学以前のマル経（マルクス経済学）が主流の大学で学びましたが、先の考え方は高校時代から既に身についていました

ので（？）「経済学」の試験成績はお陰様でもちろん〝A〟でした。

《第2章》

最初の授業のインパクトに続き、その後も興味をそそる事柄や話が出てきます。

まず、彼の授業の進め方が通常とは全く違いました。生徒が教師の役割をします。

具体的には、日本史の時代とクラスの生徒を幾つかのグループに分け、各時代を各グループに割り当て宿題として事前勉強させ、毎週グループ代表の生徒が自分でまとめたものを最初に教壇に立って発表・講義し、質疑応答の後で先生が補足説明・まとめを行うというもので、これは極めて新しい方式でした。私も発表の機会が2度あり、後で分かったのですが、これは大学のゼミ方式の導入であり、また就職してからの各種プレゼンテーションの初期訓練でもありました。

他にも革新的なことがありました。二学期末の試験問題の一部が事前に発表されたということです。「江戸幕府の鎖国政策、その功罪について論ぜよ」という問題でしたが、100点満点の内の25点と配点ウエイトが高かったので、図書館などで調べて勉強した記憶があります（試験では資料等の持ち込みは不可でした）。

半田先生は、日本史をいわゆる受験科目の暗記ものとしてではなく、歴史を様々な観点から見て考えることを重視していました。試験によく出る事柄には一応触れますが、それよりも周辺の興味深い事柄・史実をピックアップし、そのテーマに焦点を当てて話をしました。

そのテーマは数え上げれば切りがなく、例えば日本歴史の流れ・見方、朝廷・天皇、地道なフィールドワーク、宇佐神宮、国東半島での発掘作業・実地調査など格調高い分野から、十二単（ジュウニヒトエ）と当時のトイレの関係、通い婚、部落の話、奴隷経済、別嬪、人身売買（特に女性）等々かなりきわどく柔らかい話まで、現在では授業で触れること自体が問題とされるのではなかろうかという事柄まで幅広いものでした。雑学的なテーマも多く、生徒ウケ狙いのところはあったでしょうが、ワケあり背景あり裏話ありの話だけでなく、例えば通貨の変遷を通史的に考える等よく練られた構成の話もあり、それらが評判を呼び大人気でした。以前予備校講師をされていたとかでその経験を生かしてか、受験のポイントと生徒の興味を引く話はお手のもので、他のクラスの生徒がもぐりで押しかける事態も起こった訳です。私は日本史を受験科目として選択していませんでしたが歴史は大好きですので、それだけに授業を教養講座として気楽に楽しめた面はありました。もし私が先生になるのであったら、半田先生のあんな授業をしたいと思います。

楽しめたと言えば、授業とは関係ありませんが、半田先生は一風変わったユニークな面もあったようで、ギター部の顧問をされていた関係か何のためか、ある時日本史の授業にクラシックギターを抱えてやって来たことがあります。当然生徒達が何か一曲やれやれと言います。授業開始のチャイムはかなり前に鳴り終わっていましたが、先生は予期していた如く「じゃあ……」と、ギターを伴奏に口笛でメロディを奏でました。曲は、♪金襴緞子の帯しめながら……♪という「花嫁人形」であったことを覚えています。日本史の授業でギターの演奏……「嘘のような本当の話」です。

《第3章》

彼の授業の進め方、すなわち生徒に自ら考えさせる自立的学習法は先進的・革新的で素晴らしい手法・方式ではありましたが、残念なことには当時の伝統的高校の校風や保守管理主義にはなじまず、受験勉強向けとしては不適当と評されていた様です。伝統的社会では、先進的なもの・革新的なことは当初批判を受けるのが常で、この方式の授業の導入も時代が早すぎたと言われるのでしょう。ある女生徒がふざけた授業をするなと職員室に文句を言いに行ったという話はうなずける気がします。雑談が多過ぎる、受験勉強向けの授業をしろと言ったのか、話の内容が余りにも柔らか過ぎるというクレームだったのかは分かりませんが、ただ、生徒、他の先生、親達の一部には不評だったことを示す事実ではあります。そもそも生徒に講義をさせることや、試験問題を事前に発表することなど、当時は考えられなかった訳ですから。

今では授業に限らず、中学校・高校の修学旅行では生徒達がその都市内での行き先を自主的に選定・選択するのが主流で、ここ数年の伝習館高校の東京修学旅行でもそうなっています。

そう言う私は昭和40年秋のあの修学旅行では、事前に内幸町のNHK放送局に手紙を出し見学していますので、既に時代は先取りしちょったとですよ。

（それはともかくとして打ち明けますと、傷心・落胆の恋心を隠し平然とした顔でいるのは、とても辛いことでした。）

《第4章》

我々が卒業した3年後に半田先生はいわゆる「伝習館事件」で福岡県教育委員会から懲戒免職処分を受けます（ということを私はかなり後になって知りました）。

処分理由としては「学習指導要領違反、教科書使用義務違反、一律成績評価による法律違反等」とされていますが、私の認識として我々の時代にはそんな事実はありませんでした。ですから彼が3人の「偏向した政治教育をする造反教諭」の一人であるとはどうにも信じられず、多分彼は革新的な考え方や教え方で周りから造反組と見なされ事件に巻き込まれ連座したのでは、とそんな気がしています。

（当時彼は確かにマルクスの唯物史観について授業で話をしましたが、あれはあくまで歴史の見方の一つ、一般教養知識として教えたのであって、某教師のよう

に「マルクスレーニン主義について述べよ」「毛沢東語録について述べよ」等の試験問題を出し、偏った思想を煽って教えていたのとは明らかに違います。）

但し、処分取消を求めた訴訟の判決文などから判断するに、この事件は上記の違反以外に生徒の政治デモ参加と式典での喧騒・妨害行為、教職員の新任校長着任拒否・休暇闘争・ストライキ参加等の組合活動など他に多くの事件・問題が密接に絡んでいた模様ですので、それが関係しての処分なのかも知れません。

インターネット情報によりますと、現在半田隆夫氏は柳川在住で北九州の大学で教鞭をとっておられ、その著書・著作は百二十冊にも及びご活躍の様子です。

尚、本稿は事件前夜としての当時の私の体験を書いており、卒業後すぐ柳川を離れた故、高校のその後の状況・展開や彼に何があったのかはよく知りません。従って、私の知らない情報や事実もあるかと思いますが、この点お許しを願います。

最後に、余談ですが、身近な話を一つ。

10年近く前に、私の長男は中高一貫教育の進学校である私立高校に通っていました。ある時そこでの日本史の授業が、なんとナント、半田先生と同じ方式で進められていることを知りました。私は嬉しくなって息子に自慢げに言いました。

「このやり方はね、俺の高校でとっくの昔にやってたよ。もう35年も前にだよ、公立だよ、しかも都会でなく地方の田舎の高校でだよ。すごいだろ、オレの高校は！　……やっぱ伝習館は名門だい！」

以上

柳川だより

在イタリア綿貫直諒君の帰柳
高14回同期生暑気払いの集い

高14回　黒田　喬

イタリアで画家として活躍中の高14回同期生綿貫直諒君が久方ぶりに帰柳、蚊も息絶える猛暑真っ只中の昨二二年九月二日、柳川及び近在の同期生23名が集い、市内の料理屋で暑気払いの会を開きました。

事前の段取りもない、綿貫君の日程に合わせた集いでしたが、山口県から馳せ参じた意欲的なメンバーもいたりして、互いの近況や昔話にと3時間が大いに盛り上がり散会しました。（有志は二次会、三次会へ）

ざっと綿貫君をご紹介します。

三橋町の生まれで、伝習館卒業は昭和三八年、東京芸大大学院を卒業後、昭和五七年に夫妻で（ご夫人は芸大の同期生です）イタリアに渡り、以後28年間彼の地においてひたすら描き続けています。

いずれの会派にも属しない独歩の道を歩んできました。

誠実でひたむきな人柄そのままの画風は（主に風景画です）多くのファンが新作を待ち望んでいます。

作品の発表の場は主に日本、特に松屋銀座では昭和六一年以来ほぼ隔年毎に個展を開催、今年（平成二三年）も十月に12回目の開催が決まっています。

彼の人柄や力量は無論のことですが、四〇歳を目前に〝退路を断って〟夫妻で新天地に立ち向かった心の強さに我々は大いに勇気をもらっています。

我々高14回生も皆晴れて高齢者（六五歳）の仲間入り、時間の余裕も出来、又「元気で会えるうちに会っとこう」という意識も手伝ってか、同期会の頻度も増えているようです。

同期生も大雑把には地元・福岡・東京グループと分けられるようですが、特異な存在が福岡組。

2ヶ月に1回の開催、それも毎回30名以上が参加して九州モンの熱気をたぎらせています。

全国から集っての同期会は平成二一年十一月に柳川で開催しました。

次回も一人でも多くの仲間が元気な姿で集えるよう願っています。

学年幹事より

高6回（昭和30年卒）だより

高6回　石橋　修

七月十一日に開催された伝習館東京同窓会では、私たち高6回卒の参加者は十名でした。「立花家と伝習館」の講演会会場に、ご先祖が立花家とゆかりの深い、井手　真君、岡田哲也君をはじめ、同期組が次々に集まりました。そして、会場を移しての大ホールでは、一卓を同期十人で囲み、さながらミニ三稜会となりました。そろそろ高貴？　高齢者の仲間入りをする年代となりましたが、食べること、飲むことは相変わらず旺盛で、その健啖ぶりは些かも変わりありません。恒例の抽選会では、池田勝嗣君、川口鍵寿郎君がビッグな商品をゲットし、私たちのテーブルが湧きました。そのうちに次回の三稜会の話となり、12月4日（土）に、古賀譲次君の店「フロイデ」に有志が集まり、高木　健君を中心に準備打合わせ会を行うことに衆議一決しました。今度は、柳川からの善男善女の参加の話も漏れ伝わってきており、賑やかな華のある同期会になりそうです。多数のご参加を幹事一同お待ちしています。一月下旬に三稜会の案内状をお届けする予定です。

もうひとつ報告しておきます。学年幹事会では各学年毎の賛助金振り込み状況が報告されますが、私たち高6回卒は全学年の中で、ずっとトップスリーにはいっています。同期の皆様のご協力に感謝し報告させていただきます。

写真は左より、川口鍵寿郎、石橋　修、戸上軍治、古賀譲次、木村（松本）峯子、井手　真、岡田哲也、高木　健、白谷茂満、池田勝嗣。（敬称　略）

高十四回同期会開催

高14回　石橋俊一

記

伝習館高校第十四回卒東京同期会を十一月十六日十七時から銀座東武ホテル芙蓉の間に於いて開きました。幹事の中の森 重義と濱尾 淑江以下二十四名、計二十六名が参加し中には九州から駆けつけてくれた者もいました。以下参加者の名前を記します。

荒巻　猛、石橋俊一、稲田洋子（旧姓梶田）、浦家史好、大村陽子、大矢木勝彦、甲木直子（中島）、倉成禎子（蒲池）、小柳美恵子（白谷）、佐々木　優、坂井垚代子（境）、佐田悦望、高木節子（堤）、壇　雅昭、長柄道夫、仲野洋子（田中）、中の森重義、西山聆子（小柳）、濱尾淑江（鶴）、樋口郁子（松尾）、平野晴子、廣田寛子（東）、堀　勝義、松岡健次郎、松藤正吾、由布惟信

卒業年度別同期会等活動状況紹介

平成22年11月30日現在（敬称略）

卒業年度 卒業回	開催場所 開催頻度	世話人・代表幹事名 会の名称	参加人員・会費・記事等	情報提供 学年幹事
昭23年・ 中56回	不定期	数人のグループにより頻繁に開催	在京28名	成清良孝
	柳川の同期会・於御花毎年１回		22.10.30　出席22名 東京から２名参加・同期250名の内既に４割強が鬼籍に入る。	
昭26年・ 高２回 何処からでも参加できる	①関東各地ホテル等にて毎年１回不定期	神奈川・埼玉・東京千葉の３チームから幹事を選出し交代で。	毎回50名前後。男子８千円・女子７千円。ほぼ男女半々	小野善睦
	②柳川にて３年に１回	伝習館高２会 近藤正一他地元有志	毎回100名余。１万円。次回傘寿記念やるかどうか？　30な前後。６千円程度。	
	③福岡にて毎年７月７日	七夕会 永久幹事・長岡哲郎	10名前後。 実費わりかん。	
	④北九州にて不定期 （年／数回）	北柳会 会長・北原左近 幹事・増田志津子	30名前後。	
昭27年・ 高３回	毎年１回 網代（伊豆）	網代会 酒井清行（代） 樽見眞治（世） 高木邦介（世） 松崎美年子（世）	10名（うち女性３名） 一泊二日　2010.8.23～24 例年12月中旬に催していたが施設が閉鎖される事となり急遽８月に実施した。	酒井清行
昭28年・ 高４回	毎年４月に花見及び会食。ゴルフ、年２回。囲碁毎月	伝習館関東高四会 代表幹事・渡邊喜亮 幹事・荒井健之輔、福山恭輔 クラス幹事／高須信治・吉田佐紀子・水野圭介・富永たか子・高江茂子・緒方常子	ゴルフ会８名（幹事・高須信治） 囲碁会10名（幹事・渡邊喜亮） 随時同期会誌「悠悠」発行（関東以外の参加会員も含め毎号100名程度作成）。	渡邊喜亮
昭29年・ 高５回	毎年１回（最近４回～雅叙園・萬珍楼・オーシャンクオン・グランドパレス）	昭29卒「ふくの会」 その都度各クラスの当番幹事が担当	35名前後 10,000円 今年は記念すべき40回目を迎える。	松永　肅
昭30年・ 高６回	２年に１回 ３月８日（卒業式の日）	三稜会 会長・川口鍵寿郎 池田勝嗣（司会進行） 荻島直記（会計名簿） 木村峯子（締め） 石橋　修（事務局）	20～25名	石橋　修
昭31年・ 高７回	毎年１回東京及び近郊の名所散策	幹事・田中敬之助	在籍72名 参加人員20名前後	田中敬之助
昭32年・ 高８回	都内各所 ２年に１回不定期	池田孝人・内田由美子 豊島黎子・樋口綾子 龍　敏行・樋口誠佑	毎回30名前後。女性約３割。柳川からも毎回３～４名。 会費８千円程度。	樋口誠佑
昭34年・ 高10回	私達は23年前の昭和62年を第一回とし伝習館卒のみならず柳川出身の同級生が集う「柳川同期会」として現在では隔年実施しています。（東京同窓会とダブらないように……）立花同窓会長に顔を出していただく時もあります。			内山秀生
昭35年・ 高11回	①定例懇親会（一泊旅行） ２年に１回 ②関東地域名所散策 年１回	伝習館東京35回 会長　吉開　毅 副会長　近藤素子 事務局長　北原　博	会員　約50名 会費　2,000円～3,000円／年（収支の具合による） 行事参加人員　20名前後／回	永尾弘行
昭37年・ 高13回	還暦・古稀等の節目に開催。その他有志にて忘年会・暑気払い等随時開催	２年毎の東京同窓会総会後グランドパレスで二次会開催。		田中利道
昭38年・ 高14回	都内各所	中ノ森重義 浜尾　淑江	毎回20～30名　①２年毎の綿貫君の絵の個展に合わせて　②その間に１年毎　11・16予定	石橋俊一
昭42年・ 高18回	毎年１回 日時場所等適宜	福山博彰	10名前後 5,000円	福山博彰
昭44年・ 高20回	２年に１回 都内山手線内側	なんしょる会 幹事／岡　賢二 近藤敬介 高巣和登 連絡係／白谷政則	20名前後　男女ほぼ半々 会費一次会6,000円 二次会4,000円 一応関東地区の会ですが、大阪や仙台からも参加されます。	白谷政則
昭54年・ 高30回	年２回程度 東京・東京近郊	関東「傳」参拾會 橋爪政男・小野弘美	毎回10名程度 5,000円程度（税込・飲み放題付）	橋爪政男

ふるさと瓦版

参加者はみんな楽しそうに竹竿を操った

船頭体験は楽しかったばんも～

よかばんも～体験「船頭体験はよかばんも～」

柳川ブランド推進協議会は9月26日、からたち文人の足湯広場付近の掘割で船頭体験を行いました。市内外から参加した14人が、3艘(そう)のドンコ舟に乗船。プロの船頭さんにドンコ舟の扱い方を教えてもらいながら、長い竹竿を操りました。最初はうまく進めずにドンコ舟を川岸にぶつけた参加者も、真っすぐ進めるようになって船頭さん気分を満喫。参加者は「行きたい方向へ進めなくて難しかったけれど、とても楽しかった。またやってみたい」と笑顔で話しました。

「広報やながわ」10月15日号より▲

柳川沖端に水族館

新観光スポット誕生

春に観光客が行き交う柳川市沖端の水天宮通り脇に、有明海の魚介類を泳がせた「おきのはた水族館」がオープンした。旬の食材を用意した2階の食堂からは多くの愛好者に描かれた船溜りが一望できる。新しい観光スポットが誕生した。

有明海の魚貝40種

床面積330平方㍍の鉄骨造2階建て。有明海の魚貝40種を泳がせ、機械化される前の漁具100種を展示している。「有明海を育てる会」(近藤潤二代表)が運営。近藤さん(79)が20年ほど温めた構想を実現させた。

ユーモラス格好表情

魚貝はムツゴロウ、エイ(エイガンチョウ、イソギンチャク(ワケンシンノス)、ガンバ(ふぐ)、ドチザメ(フカ)、オコゼ、シマ(縞模様のクッソコ)、ウナギ、シャッパ、ガザミ、アゲマキなどがユーモラスな格好と表情で来館者を迎える。エツの稚魚も泳ぐ。

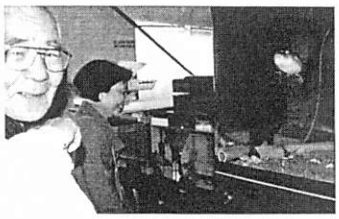
「エツが泳いでいるのを見られるのは、世界の水族館で、ここだけ」(近藤さん)。有明海という小さな領域に生息する魚貝の豊富さと不思議な造形に驚嘆する。

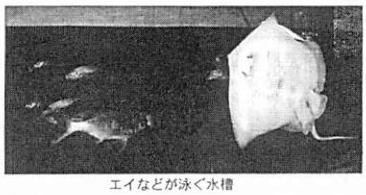
漁具では、ムツゴロウ取りの筒、ノリ摘みの海下駄など、一般の人には、タイラギ漁の潜水服も目に止まる。

2階の食堂は、久留米市城島町の料亭が出張し、「新鮮刺身などを出してくれる。驚く数と新鮮な食材が利用者を幸福感に浸らせている。」柳川の食材はうなぎだけではない。おいしい魚を食べて貰って柳川を売り込みたい」と近藤さん。

営業は土曜、日曜のみで午前10時から午後4時まで。入館料100円(高校生以下や食堂利用者は無料)。「育てる会」の活動資金に充てられる。

問い合わせは同会の近藤さん(0944・72・2271)。


入館者に展示魚貝を説明する近藤さん(左)


エイなどが泳ぐ水槽

▲「ちくごタイムス」より

「有明新報」10月15日号より▼

五足の靴ゆかりの酒

銘酒『潮』の復活

詩人北原白秋の生家、北原酒造家の銘酒「潮」の商標と、その伝統と秘法を受け継いだ酒問屋島田國蔵(祖父)からさらに受け継ぎ吟味を重ね勇躍そのふくよかな香りの味わい深い「潮」を復活させました。

・吟醸純米酒(山田錦50%精白・吟醸)
1.8ℓ 3,560円・720㎖ 1,833円
・特別純米酒(大地の輝60%精白・特別酒)
1.8ℓ 2,410円・720㎖ 1,250円
※価格はすべて税込です

祝白秋祭

五足の靴　第五章
(本文より抜粋)

筑後の柳河まで来た、海を控へて水田と川との多い土地だ。北原氏に宿る、次の日酒倉に入って色々酒造の説明を倉男から聴く。北原氏は筑後で屈指の酒造家だ。造る酒は種々あるが就中「潮」と銘打った酒は九州全体に名高い。此の粹酒は我等下戸党も良だ気に入った。あゝ、此様な酒を水と酒精との混合酒に舌鼓打つ東京人に飲ませて遣りたい。主翁が大幅の絹を展べて、何かとゑわるる侭に各「潮」の歌を書く。

百年前、北原白秋、与謝野寛、平野萬里、吉井勇、木下杢太郎ら文人達が感嘆したその味をぜひご賞味下さい。

美酒招人 島田酒店
柳川市本町135-6(裁判所前)
Tel.Fax 0944-73-3148
E-mail:ushio@rice.ocn.ne.jp

新

市史抄片 68

権門に媚びず、時流に惰せず ～曾我祐準～

■問い合わせ
市生涯学習課市史編さん係（☎72・1275）

現在の柳川市民会館の場所に「曾我子爵誕生之地」という石碑が建っていたのをご存じの方もいらっしゃるかと思います。この曾我子爵というのが、柳川出身の軍人であり、政治家である曾我祐準です。

祐準は、天保14（1843）年に柳河藩士祐興の次男として、坂本小路（現柳川市坂本町）に生まれました。

元治2（1865）年、洋式兵学修業を志して長崎へ赴き、慶応2（1866）年から3年にかけ、航海術を学びます。おそらく、こうした経歴によると思われますが、明治元（1868）年戊辰戦争のさなかに新政府に出仕して戦列に加わり、西南戦争では第四旅団司令長官として鎮定にあたりました。

▲85歳の祐準（昭和3年撮影）

その後、熊本鎮台などの司令長官や、参謀本部次長をつとめて、陸軍拡張・改革計画を推進し、明治16年陸軍中将に累進し、同17年には子爵を授けられました。

明治19年陸軍士官学校長に転じ、まもなく軍職を去りますが、その後、東宮大夫（明治22年設置）、帝室の典範儀式に関して諮問を受ける宮中顧問官を歴任しました。同31年から39年まで日本鉄道会社社長をつとめ、明治24年から大正4（1915）年までは貴族院議員としても活躍しました。

故郷である柳川に対しては、旧藩主家である立花家の家政運営に関与したり、同郷出身者に対する援助など、郷里の発展にも力を尽くしました。祐準は昭和10（1935）年に亡くなりますが、柳川の歴史編さんに携わった岡茂政（明治8年～昭和22年）は「郷党唯一の崇敬の標的」と評しています。表題の「権門に媚びず、時流に惰せず」も同氏の追悼記事によります。

この、曾我祐準に関わる遺品が、ひ孫の川原敏雄・春子夫妻（静岡県熱海市在住）から、柳川市に寄贈されました。内容は、祐準着用の大礼服（正衣）や旭日桐花大綬章および勲記、鳩杖、写真、『曾我祐準自叙伝』執筆に関わる原稿や戦記類、書簡類など多岐にわたります。これらの詳細な調査によって、近代国家の建設期にあたり、祐準が果たした役割を明らかにできると思われます。

▲10月6日に行われた遺品贈呈式。金子市長（右）から川原夫妻へお礼の記念品が贈られた。

なお、寄贈品は柳川古文書館で整理・保管されますが、一部を来年1月から始まる常設展で公開する予定です。

市史編さん係　江島　香

▲「広報やながわ」11月日号より　― 曽我祐準は藩校伝習館の大先輩です ―

柳川にこの人あり vol.19

秋野隆士くん
柳町・16歳

掘割の研究で金賞を受賞

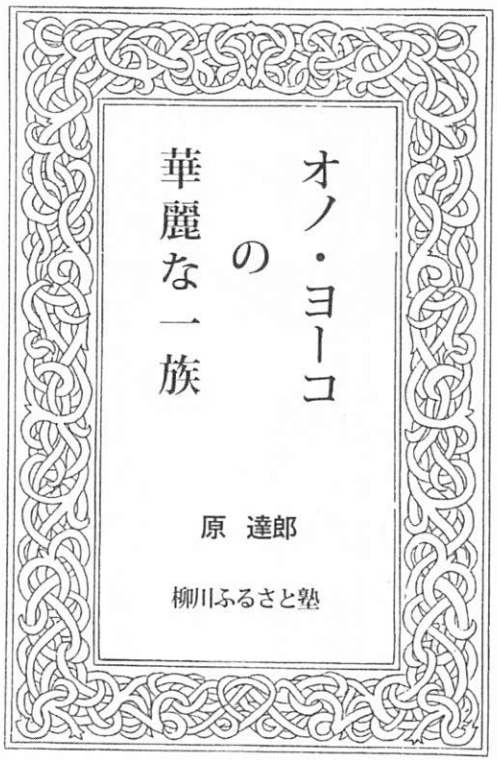
掘割の研究を行い、第53回全国学芸科学コンクールの人文社会科学研究部門で金賞を受賞した秋野くん。さらに特別賞の日本科学技術振興財団会長賞にも輝きました。秋野くんの研究テーマは「柳川の掘割について～人と掘割との共生～」。中学校の卒業論文として取り組んだ研究でした。「柳川のまちに興味があり、その柳川の中枢は何だろうと考えたとき、やはり掘割だと思いました。自分にとって掘割が身近だったこともあります」と、研究しようと思ったきっかけを話します。

論文では、掘割の役割・歴史などから現状・問題点、そしてその解決策についてまとめられ、市民へのアンケートやインタビューも実施。費やした期間は、およそ2年間にわたります。「調べたことを自分の考えとしてまとめていく作業が難しかったです」と研究を振り返る秋野くん。掘割についての課題も見えてきましたが、「四季折々の掘割を観察していく中で、改めて柳川のよさを感じることができました」と、柳川の魅力を再発見できたのも大きな収穫。「人が掘割とかかわれば、水がきれいになる。きれいになれば人の心も豊かになるという好循環ができればいいなと思います。自分自身、どういう行動ができるかが今後の課題です」と、その目はしっかりと次を見据えています。

▲「市報やながわ」より

新刊紹介

オノ・ヨーコの祖父、小野英二郎は柳川市新外町の出身で中学伝習館の大先輩です。今も武家屋敷の門構えだけを残した屋敷跡があり、原さん達の努力により整備され一般公開されています。



■著者
原　達郎
1943(昭和18)年　柳川市生まれ
柳川観光大使
柳川ふるさと塾　塾長
住所　811-1361　福岡県福岡市南区西長住3－25－15
電話　092－512－2500
著書
「柳川ふるさと塾①」　柳川ふるさと塾
「九州文学散歩・柳川」　財界九州社
「柳川文学散歩案内」
「白秋の食卓」　財界九州社
「ラーメンひと図鑑」　弦書房
「九州ラーメン物語」「久留米ラーメン物語」
出版
長谷健「からたちの花」(白秋三部作①)　清潮社
江口章子(北原白秋夫人)詩集「追分の心」
■
資料・写真提供　野田美奈子
イラスト　　町田泰通

==========

オノ・ヨーコの華麗な一族
2010(平成22)年8月3日　第1刷発刊
発行者　柳川ふるさと塾
発行所　811－1361　福岡県福岡市南区西長住3－25－15原方
電　話　092－512－2500　携帯　090－8835－5957
定価1500円＋税

賛助金のお振込方法

① 同封の郵便振替用紙による
② 銀行振込による
　銀行名　　三菱東京ＵＦＪ銀行 銀行コード(0005) 支店名 駒込支店 店コード(061)
　普通預金
　口座番号　１０７３６７３
　口座名　　伝習館東京同窓会

いづれのお振込の場合にも必ず回生又は卒業年度をお書き下さい。

賛助金のお振込方法

① 同封の郵便振替用紙による
② 銀行振込による

銀行名　三菱東京ＵＦＪ銀行 銀行コード(0005) 支店名 駒込支店 店コード(061)
普通預金
口座番号　１０７３６７３
口座名　伝習館東京同窓会

いづれのお振込の場合にも必ず回生又は卒業年度をお書き下さい。

募集中！

1. 表紙絵・表紙用写真
2. 原稿―伝習館ＯＢならダッデンヨカバンモ
○テーマ―自由（同窓会報にふさわしいもの）
小説・随筆・詩・短歌・俳句・川柳、絵画・写真・絵手紙、書など
○字数制限なし（極力四〇〇字詰め（20×20）原稿用紙使用）
写真・絵・カット添付可
○表題・投稿者氏名・卒業年度・総字数を書いて下さい。

―原稿送付先―
〒３４４－００３２
春日部市備後東８－８－３２
伝習館東京同窓会　小野　善睦　行
☎・ＦＡＸ０４８－７３５－２４３１

広告募集

チラシ広告
対象＝東京同窓会会員向けに製品・商品営業内容をＰＲ、販売したい方。
○チラシ三千部を作成し（フォーム自由）事務局宛（裏表紙参照）送付下さい。会員への会報送付時に同封郵送します。
○広告代金＝一件につき弐万円を賛助金として頂きます。

会員の皆様からも、希望業者の方をどしどしご紹介下さい。

編集後記

○今号はおかげさまで、ご投稿が多く充実した内容になりました。
顕彰　廣松渉～青春のパイプラインまで、重厚から軽妙まで読み応えがあります。投稿者の皆様ありがとうございました。
○特に立花ご兄弟の玉稿は光彩を放っております。簡にして要！　執筆者の頭脳明晰ぶりが伺える文章で感心しています。
宗茂の奇跡の復活の謎～なる程なる程と「目からうろこ」が落ち「喉につかえた小骨」が取れた気分です。立花家と母校の密接なつながり、「橘陰」の意味、歴史を感じました。
今後も「第17代立花家当主・立花宗鑑」という名前で沢山執筆して頂き、いつの日かＮＨＫの大河ドラマに「立花宗茂」が登場する日を期待したいと思います。
○そういう意味で今号は永久保存版ですゾ！と自画自賛しています。
○現在の編集委員は次の通りです。
小野　善睦（高２）
内山　秀生（高10）
永倉（跡部）素子（高10）
江崎　正直（高２）
松永　肅（高５）
原田（立花）万紗子（高13）

発行責任者　江崎正直
〒１５６－００４３
東京都世田谷区松原３－39－25
801

伝習館東京同窓会事務局
〒170-0003　東京都豊島区駒込3丁目3-19　千鳥屋方
TEL 03(3915)0865　FAX 03(3918)8139
http://densyukan-tokyo.jp/

賛助金のお振込方法

① 同封の郵便振替用紙による
② 銀行振込による
　銀行名　三菱東京ＵＦＪ銀行 銀行コード(0005) 支店名 駒込支店 店コード(061)
　普通預金
　口座番号　１０７３６７３
　口座名　伝習館東京同窓会

いづれのお振込の場合にも必ず回生又は卒業年度をお書き下さい。

伝習館東京同窓会学年幹事名簿　平成21年10月現在

卒業年次	氏名	卒業年次	氏名	卒業年次	氏名
中学第48回	宮本弘道	第9回	石橋淑子（古沢）	同上	樋口貴美子（田上）
同上	中野貞幸	同上	原田光紀	同上	佐竹優子（池上）
中学第49回		第10回	内山秀生	同上	吉村明恵
中学第50回		同上	永倉素子（跡部）	第24回	酒見和平
中学第51回	松田　含（星野）	第11回	北原　博	同上	笹子幸子（川津）
中学第52回		同上	永尾弘行	第25回	
中学第53回	古賀和典	第12回	小野アケミ（岸川）	第26回	
同上	木下憲男	第13回	田中利道	第27回	
中学第54回	富重克巳	同上	尾田義昭	第28回	吉開孝人
中学第55回	江崎和夫	同上（副会長）	原田万紗子（立花）	同上	中島眞二
同上	小泉祐一郎	第14回	石橋俊一	第29回	
中学第56回	鬼丸敏男	同上	吉田節子（堤）	第30回	橋爪政男
同上	成清良孝	第15回		同上	小野弘美（中山）
高女第45回	石橋佳香（石橋）	第16回	椛島正司	第31回	池松利活
高校第1回	永江政勝	同上	安倍環江（松藤）	第32回	柴田雅秀
同上	増尾義勝	同上	水澤昭子（田中）	同上	一木享之介
第2回	石崎知見	第17回	宇木博巳	同上	大山　恵（相浦）
(会長)	江崎正直	同上	北島文之	同上	守谷由佳（富重）
(編集委員長)	小野善睦	同上	下吹越智佳子（横山）	同上	森　雅宣
第3回	酒井清行	同上	藤木清勝	第33回	廣松崇人
第4回	荒井健之輔	同上	浦川邦憲	第34回	
同上	丸勢正夫	同上	福山雅文	第35回	山口英治
同上	渡邊喜亮	第18回	福山博彰	同上	橋本知彦
第5回	岸　栄洋	同上	十時理展	第36回	松藤　亘
(副会長)	松永　肅	第19回	芹川季代子（立花）	第37回	江口一元
第6回	石橋　修	第20回	高巣和登	第45回	浦　裕美
同上	戸上軍治	第21回	西原正道	第50回	河内慎治
同上（会計）	荻島直記	同上	白谷政則	第51回	大曲由起子
第7回	田中敬之助	第22回	北原富美男	第59回	川口　惇
同上	龍　弘道	第23回	坂本智臣		
第8回	樋口誠佑	同上	成田八重子（成田）		

幹事未選出の学年は至急選出して事務局までご連絡下さい。

FAX 送信紙

FAX：03-3918-8139

伝習館東京同窓会事務局 御中

発信者お名前

TEL：FAX

中学：高女：高校第　　回卒

事務局への意見、連絡、感想など。

又、会報へのご投稿（短文、詩、短歌、俳句、川柳など）に使用下さい。

裏表紙写真の紹介

撮影　高３　西山　彰 氏

―――伝習館同窓会顧問、元伝習館校長――

伝習館生徒→後、教諭→後、教頭→後、校長と異色の経歴の持主。

毎回、東京同窓会総会に出席されている。